

# 針葉樹会報

第 153 号  
2023 年 12 月



## 目次

■記録・紀行	
シャモニ・モンブランのろのろ歩き	加地 幸雄
〜後編〜	2
針葉樹会有志による北海道山行	中村 雅明
―蛭川氏追悼― 全体報告	6
ニセコアンヌプリ登山	竹中 彰
旭岳と羊蹄山	11
(2023年夏の北海道…前哨戦)	佐藤 活朗
2023年7月	13
蛭川氏追悼と北海道行	本間 浩
山行記録―アポイ岳	佐藤 久尚
神威山荘から美瑛富士まで	曲 文琛
様似山道	中村 雅明
余市岳と樽前山	前神 直樹
山と私	石原 脩
2	26
図書幹事より―ご報告とお願い―	中村 雅明
書評	佐藤 周一
33	31
会務報告	35
学生の活動記録	49
編集後記	56

表紙写真「ご来光(笠ヶ岳山荘前から)」  
2023年9月10日 撮影・前神 直樹

発行日 2023年12月5日	<b>針葉樹会報</b> 第153号	編集人 岡田 健志
発行者 針葉樹会 (会長 前神直樹)		〒248-0022
印刷所 ヤマノ印刷(株)		鎌倉市常盤 937-53 会報幹事/岡田健志、藤本敏行

一橋山岳会ホームページ <http://huhac.com/>

シヤモニ・モンブランのろのろ歩き  
 後編

加地 幸雄（1958年卒）

Aiguille Verte と Les Drus 三景

これら三峯の北東約5kmに Aiguille Verte（緑針、4122m）と Les Drus（3754m）が並んで屹立する。Aiguille Verte は例の Whympar が1865年に初登頂した山の一つだ。

写真9では Aiguille Verte が左側、Les Drus が右隣、人物は右が昌、左は仲間の Vincent、下にシヤモニ郊外の村が写っている。

写真10は Les Drus、Aiguille Rouges の裾野の Petit Balcon Sud（南側の小棚）歩きで撮った。

Aiguille du Midi より大観

シヤモニは登山の中心地だが、詰めかける群衆は登山でもなく、山歩きさえせず、ただ物見遊山に来る人が、圧倒的に多い。そして



写真9 同行の昌と Vincent 撮影：加地幸雄

彼等遊覧客の第一候補は町からケーブルカーに乗って3842mの Aiguille du Midi の頂上に立ち、アルプスの雄大な景観を楽しむことだ。

僕はもともと、山は乗り物に運び上げられるものではないという観念もあるし、雑踏も気疎い。しかしこの年では登る体力もなく、折角ここまで来て一大景観を逸するのも勿体ないと思われ、9月12日月曜、雑踏にはできるだけ目を瞑ってケーブルカー乗り甘んじることにした。ケーブルカーの終点、Aiguille

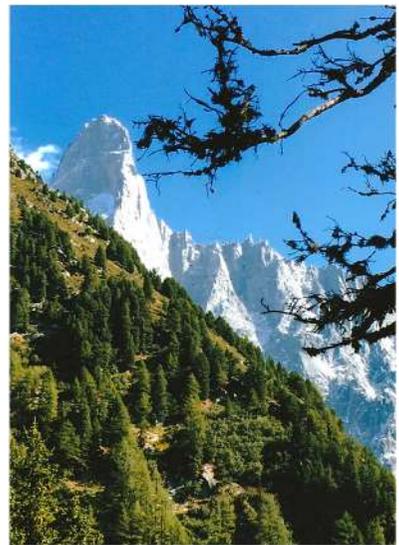


写真10 Les Drus（Aiguilles Rouges から）撮影：加地幸雄

du Midi の頂上で意外な事態が発生した。急速に2800m上昇したための高山病の症状と、酸素不足とは無関係らしい腹痛の二重発作。人込みに分け入って便所を探し回り、漸く見つけたのは良かったが五、六人列を作った順番を待っている。辛うじて間に合った時は、まさに九死に一生を得た思いであった。その貴重な「一生」のお蔭で、いまだに目眩しながらも好天に恵まれ、モンブラン山系の展望を果たした。

写真4（152号19頁）、11、12はその時、Aiguille du Midi から撮影。

写真11は東方の連峯で、右側に突出しているのは、Dent du Geant（巨人の牙、4013m）、左側に聳え立つのは Grandes Jorasses（4208m）と推定する。

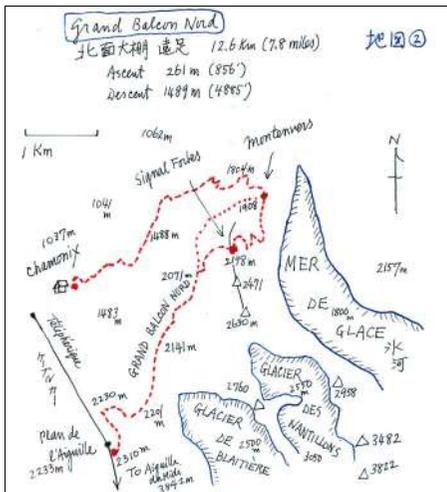
写真12は北東の山景。天末線左側の山塊は、左から Aiguille du Plan (3673m)、Aiguille de Blaitiere (3522m)、Chamois Crepon (3482m)と推定する。この推定が正しければ、写真6(152号19頁)に写る三峯と同じだが、方が違うため三峯が接着し一山塊に見える。写真11、12と前出の写真4を照合して、Aiguille du Midi頂上からの大展観を想像していただきたい。



写真12 Aiguille du Midiから北東の山景 撮影：加地幸雄



写真11 Dent du GeantとGrandes Jorasses 撮影：加地幸雄



地図2 Grand Balcon Nord 地図：加地幸雄

Grand Balcon Nord (北面大棚) 三景  
 ケーブルカーで下って中継所の Plan de l'Aiguille (2233m、地図2参照)で下車。そこからシャモニ・モンブラン近辺屈指の歩き道と言われる北面大棚を歩き始めたのは二時過ぎ。Aiguille du Midiから1600m下りたため、目眩も吐き気も治まり、まず好調。右手には岩峯が次々と切り立ち(写真13)、左側は針葉樹林帯の急斜面がシャモニ谷へ落ちていく。大棚の山道は歩きやすく、先行する昌も手を広げて応援してくれる。  
 写真14は、顧みた景観、右端の天末線に辛うじて見えるのはケーブル線の支持塔で全線路の中継所 Plan de l'Aiguille に当たる。



写真15 Grandes Balcon Nordより Aiguilles Rouges 撮影：加地幸雄



写真14 Grand Balcon Nordの出发点をふり返る 撮影：加地幸雄



写真13 Grand Balcon Nordの山道 撮影：加地幸雄

Plan は台地の意。その台地を少し左へ登った所に見える黒い影は山小屋。そこで何か食べるとよかったが前途を控えて勇み立ち、素通りした。写真左上の隅にほんの少し顔を出しているのはモンブラン。

写真15は谷の向う側の Aiguilles Rouges の山々。

### Signal Forbes-Montenvers-Chamonix

今日の遠足はこれから先、Signal Forbesに登りMontenversに下って、登山電車でシャモニへ帰るのが当初の計画だった。この経路の最大の勝景はSignal Forbesから見下ろす氷河Mer de Glace（氷海）と岩峰を背後にした氷河上流の遠見、だが標高2071mの岐路に達した時は四時少し過ぎ、Signal Forbesは諦めてやや等高線に沿った左股を行かないと、五時の最終電車に間に合いそうもない。たまたま一人の人が現れたので昌に尋ねてもらうと、左股は近道だが途中決壊しているので、右股を勧められた。

右股はかなりの険路で、登り始めると直ぐ疲れを感じた。今日ここまでの道程はさほどでもなかったが、高山病も、下痢による弱化もあり、前日の山行の疲労も重なったのである。二、三十歩登っては杖に上半身の重みをかけて小休止、標高2200mのSignal

Forbes に辿り着いたときは既に最終電車Montenvers発時の五時、僅か127mの登りにガイドブック2倍の時間かかった。

写真16は筆者。かなり疲れていたが、荘厳な山岳美に身を浸し、山の神殿に「をろがみ」している。右に切り立つのはLes Drus（3754m）、中央は登山史上上席を占めるGrandes Jorasses（4208m）の北壁、左側の天末線に僅かに白い姿を見せているのは、例の三国に跨るMont Dolent（3823m）と推定する。

写真17はLes Drusを仰ぐ筆者。氷河を見

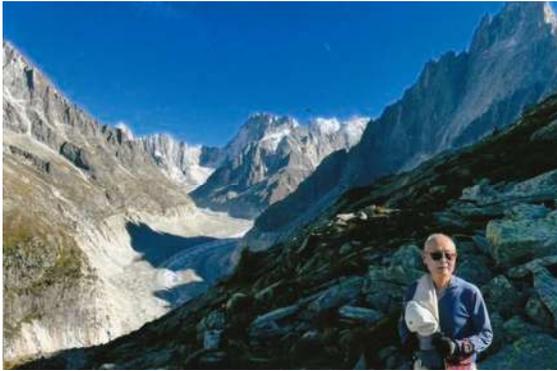


写真16 筆者（Signal Forbesにて） 撮影：加地昌

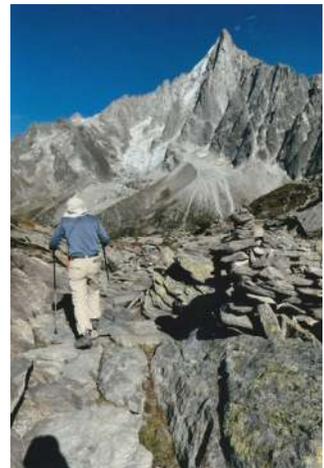


写真17 Les Drusに向かって  
撮影：加地昌



写真18 昌（Signal Forbesにて） 撮影：加地昌

下ろそうと崖縁に向かってよろよろ歩き。

写真18はSignal Forbesに立つ昌、「シニヤル」は日本語になった「シグナル」と同根、

合図などの「叫び声」の意。18世紀に測量家の Forbes 氏がこの地に立って感嘆の声を上げたのであろうか。そして氷河を見はるかし、Glacé de Mer（氷の海）と命名したのであろうか。悲しいことに、Glacé de Mer は上流ではいまだに自己存在を誇っているであろうが、この辺りではモンタナ州の「氷河国立公園」と同様、名ばかりだ。

Signal Forbes から Montenvers まで、道標にはご覧の通り35分とあり、ガイドブックには45分とあるが、僕は30分で下った。僕は運動誘発性喘息を患っているが、下りは肺機能への負担が軽くなるのでまあまあ通常のペースになる。Montenvers 五時半着。ホテルの屋外休憩所食事所で一休み、大瓶の水を飲みほして、捲土重来と言いたいところだが、少し大袈裟か。谷へ下り始めたのは六時頃。



写真19 Grandes Jorasses  
(Montenvers から) 撮影：加地幸雄

写真19は後日登山電車で家内と来た時に Grandes Jorasses を見上げて撮った。当日は疲れ果てて写真どころではなかった。

Montenvers から谷底のシャモニへの道程は長く、所々急峻。仄暗い森の中をひたすら下るのみ。歩き始め六時、帰宅八時半。町外れで夜の帳が下りた。同行の昌と Vincent はともに四十代、強くて早いが一日中随所で私を待ってくれた。「家」では家内の「edre」が美味しいポテトサラダを拵えて待っていてくれた。

当日、一つ意外であったのは、山道に人がいないこと。2071mの分岐点から2198mの Signal Forbes を越えてシャモニの町まで四時間半歩いたが、その間出遭ったのは僅か五、六人。シャモニの町の雑踏は数万人。Grand Balcon Nord は歩きやすく道標も十分、その上ご覧通りの絶景。それ程「奥の細道」ではないが、人跡稀とは予想外の楽しみであった。

25年程前、モンタナの氷河公園を北から南へ八日かけて縦走した時も同様の経験をした。駐車場は満車、隣の幕営場も満員だったが登山口から僅か二、三時間歩くと、早くも人跡絶つ。前述した三大流域の集合点を通った時も、数日人を見なかった。その頃、針葉

樹会の会員のどなたかが氷河公園を訪れ、会報に感想を書いておられたが、奥には入られていないようであった。「花は桜」なら、「山は奥」との心得は何処へやら。その点でアメリカ合衆国の大陸分水嶺は、アラスカも同様と察するが、優れて居る。十日歩いて山小屋は一軒もなく、人は一人にも遭わないような所が、モンタナ、ワイオミング、コロラドにある。そのような所を直向きに歩いている筆者を写真20でご覧みたい。右手に携えているのは熊よけの筒鉄砲、いつでも発射できるように用意していた。（この写真を撮ったのは半世紀に亘る山仲間 Arthur だったが、昨年死に別れた）

因みに三週間かけてマナスルを周遊した時も、ブリガンタキ谷を詰めた初めの二週間、山歩きの人とは一人も出くわさず、5213mのラルキヤ峠越えの日、行動時間16時間中



写真20 モンタナ・ロッキーにて  
撮影：加地幸雄

に逢ったのは三人組の日本隊だけだった。「山は奥」の醍醐味を満喫した。(ただし、マルシャンディ谷を下る最後の四、五日はアンナプルナ周遊路と重なり、人気は急増した。)

寄る年波で体力の限界が何処にあるか、いつも気になっていたが、答えを出すのは困難だ。当日の歩行全距離は12・6km、登り261m、下り1489m、行動時間は小休憩も入れて六時間半。この経験で下りは1500mが私の現在の限界線と判明した。というのは Montevens あたりから膝ががくがく、シャモニの町はずれに下りた頃は、一歩一歩過労を訴えだして来た。ところが普段1500m下るには1500m登る必要あり、この登りは体力の限界を遥かに越えているから1500mの下りを気にする理由は皆無。山は年相応楽しみたいが残る問題は一気に登れる限界は何処にあるか、だ。五千尺の約半分と察するが、その壁に当たりそうな体験は最近していない。この問題は、換言すれば地元ウォサッチ連山の昔の難易度中級の山々が今の体力の限界内か外かだ。注意して体当たりするほかなし。

9月10日シャモニ着、21日発、その間山歩きは6日。好天に恵まれ、雨の中を歩いた

のは一日だけ。一夜雪降り、雪線は谷底に至らなかつたが翌朝山腹は新雪に輝いた。日中の気温は5℃から15℃、7月と8月38℃を越える日が20日以上以上の塩湖城に対してシャモニ・モンブランの清涼は際立ったものだった。

私が山好きになったのは、北海道の静内という所に疎開中。下校後、日高山脈に端を發する染退利川が真歌山を削ってきた崖を登りに行ったり、週末に級友と町の西側の泊津山へ行って道を失い、真暗闇の中にランプの一点を見つけ、辿り着いたのは隠者の小屋だったりした。

戦後東京に帰り中学から大学一年まで蹴球に熱中したので山は疎かになったが、それでも1949年中二の夏、富士山に登った。当時の僕の姿を思い出した母の作句に、

腹巻に 錢地下足袋の 富士登山  
がある。

2022年12月23日現在、年間山行日数は69日を数える。一生山のお世話になり、山を楽しませて頂いた。山の神様、シャモニ・モンブラン誕生の近代登山と、一橋山岳部のお蔭だ。

シャモニ・モンブランの楽しみ方は三つある。一つは秀峯の登攀、一つはモンブラン山

系の周遊、一つは日帰りの遠足。遠足に行かれる方があつたら、僕の行きそびれた勝景屈指の地 Lac Blanc (白湖) をお勧めする。

合掌

## 針葉樹会有志による北海道山行 — 蛭川氏追悼 — 全体報告

中村 雅明 (1968年卒)

本山行の切っ掛けは2023年3月1日に本間さん企画の河津桜ハイキングの際、小島さん、佐藤(久)さんから7月の北海道に蛭川さんの墓参とアポイ岳登山に行こうとの話が出たことで、中村が幹事としてプランを作りますと約束しました。

2020年に蛭川さん、小島さんと計画し、コロナ禍で2年、昨年はメンバーの体調不良で延期した「雨竜沼湿原・南暑寒別岳&アポイ岳・様似山道」山行をベースにした計画案を3月半ばに小野さん、小島さん、佐藤(久)さんに送りました。

変更点は、

①日程は針葉樹会の総会の前の7月中旬の7

日間

- ②前半は雨竜沼湿原ではなく、以前小野さんからお勧めあったニセコ連山に変更
  - ③札幌に戻った後、札幌観光でなく、故蛭川隆夫氏の墓参
  - ④移動は鉄道・バスでなく、北海道山行の時にいつも車の運転&ガイドをお願いしている手塚氏（小野さんの後輩・北海道電力山岳部OB）に依頼、です。
- この案に対して小野さんからその晩に早速計画案を頂きました。その迅速なことに驚き感謝しました。その計画案は、
- ① 7月13日 羽田―新千歳―手塚、小野迎え―手塚運転の車でニセコ五色温泉泊
  - ② 7月14日 ニセコアンヌプリ登山、札幌へ、東横イン宿泊
  - ③ 7月15日 午前蛭川さんの墓参、アポイ山荘泊
  - ④ 7月16日 アポイ岳登山
  - ⑤ 類似山道以降の2泊3日のコースは切り離し、7月17日類似山道コース東口登山道入り口へ中村夫妻を送り新千歳空港へ―解散の4泊5日の案です。
- 蛭川さんは2006年に竹中さん、小野さんとニセコアンヌプリに登っています。アポイ岳は以下の通り、蛭川さんに関わることが

多いです。①2012年7月のアポイ岳登山の詳しい報告がHPに掲載されています（注1）。また、同行された岡田健志さんがHPに「アポイ岳の花」を投稿されています。②アポイ岳・類似山道の資料を2020年の計画時に沢山いただきました。また、様似町へのバス時刻表もいただきました。③蛭川さんの勧めでアポイ岳の希少蝶「ヒメチャマダラセセリ」のクラウド・ファンディングに有志（佐藤・蛭川・本間・小島・岡田・中村）が応募しました（2021年4月）。従って本山行の2山は蛭川さんを偲ぶ山としてふさわしい山です。

参加者取り纏めを指名された中村が小島さん、小野さん、佐藤（久）さんの外、蛭川さんの同期の竹中さん、本間さん、北海道山行シリーズの常連の岡田さんにもご案内しました。さらにこの計画を知った神威岳・ペテガリ岳を狙っている前神さんと曲さん、北海道の山に再入門＆本格的に取り組む意向の佐藤（活）さんも参加することになりました。それぞれの事情、山行目的から決まった7月13〜17日の基本日程への参加者の行動は別表1の通りです。なお、札幌に戻った14日の晩に針葉樹会員10名＋中村夫人と蛭川夫人が参加する総勢12名の蛭川氏追悼懇親会も行う

別表1：7月北海道山行 参加者一覧

中村（雅）作表

日	日程	竹中	本間	小島	小野	手塚	佐藤(久)	岡田	中村夫妻	前神	佐藤(活)	曲	特記
13	札幌・空港集合	○			○	○	○	○	○	○			
13	五色温泉泊	○	○		○	○	○	○	○	○	○		
14	ニセコアンヌプリ登山	○	○		○		○	○	○	○	○		
14	懇親会参加	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	注1
15	墓参り参加	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
15	アポイ方面移動			○	○	○	○		○				
15	アポイ山荘宿泊			○	○	○	○		○				注2
16	アポイ岳登山			○	○	○	○		○				
17	新千歳空港解散			○	○	○	○						
	年齢	81	82	81	82	72	81	80	79 75	71	68	30	

(注1) 蛭川夫人参加

(注2) 15～16日連泊

ことになりました。最初ベースにした4名の個人山行から、針葉樹会員有志による北海道シリーズの復活と蛭川氏追悼も加わった大きなイベントになりました。

また基本日程の前哨戦を本間さん（11日）、西吾妻山、15日午前・イワオヌプリ、ニトヌプリ）、佐藤（活）さん（9～12日大雪山、羊蹄山）が計画されました。また15日以降の延長戦が本間さん（15日・塩谷丸山、17日・磐梯山）、中村夫妻（17日・様似山道）、前神さん・佐藤（活）・曲さん（16日・神威岳、17日・ペテガリ岳）により計画されました。

6月20日に小野さん、手塚さんによる下見を踏まえて詳しい行程表と参加費見積表を小野さんが作成され6月末に全ての準備が整いました。

〔注1〕『「橋山岳会HP」』『国内山行報告』  
「2012年7月18～20日 針葉樹会  
志による北海道のアポイ岳登山」 蛭川隆夫

【行動実績】

基本日程実績を別表2、前哨戦・延長戦の実績を別表3に示します。以下は特記事項です。

別表2：【基本日程実績】 7月13～17日

（小野肇作成 中村一部加筆）

7月13日(木)	7:40 小野自宅発 9:30 ワンズレンタカー千歳営業所 10:00 全日空到着口集合—佐藤（久）前神 [小野、手塚迎え] 10:30 後続の千歳空港着の時間確認し千歳市内の千歳水族館見学 「インディアン水車の名前の由来を教えてください」 スーパーで食材、飲み物ゲット。 15:50 竹中、岡田、中村夫妻 遅れて合流 全員で五色温泉へ 17:20 寿司ネタ、氷、ノンアルコールを倶知安で購入。 18:00 首を長くして待っていた本間さん、佐藤（活）さんと合流。 20:00 20時 生ビール、手巻き寿司、そばなどで夕食、懇親。
7月14日(金)	7:50 ニセコアヌプリ目指して出発（登り3H,下り1.5H） 13:40 五色温泉キャンプ場下山、冷えた生ビールが待っていた 14:00 余市経由で札幌へ出発 17:00 前神、佐藤（活）ウインダムガーデン札幌大通チェックイン 竹中、小島、本間、佐藤（久）岡田、中村夫妻 東横イン札幌南口 18:30 「くしどり番外地」で懇親会 小野、曲、蛭川夫人参加 21:00 解散
7月15日(土)	8:00 東横インロビー集合 9:00 滝野霊園管理事務所集合 ふるさと霊廟お参り。「山讃賦」斉唱。12人。 9:50 滝野霊園を出発。 10:20 地下鉄真駒内駅で竹中、本間、岡田はJRに乗換え 小島、佐藤 [久]、中村夫妻、小野でアポイ方面へ。 佐藤 [活] 車は前神、曲3人で静内方面へ別行動。 12:30 セコマで高速を降りる 13:00 「樹林」（キリン）でランチ 16:00 アポイ山荘着（泊）途中で翌日の行動食各自購入
7月16日(日)	7:00 アポイ岳目指し出発 小島&小野 馬の背まで アポイ山荘着（連泊）
7月17日(月)	8:30 中村夫妻送り。 9:00 様似山道東登山口（幌満コミュニティセンター駐車場） 10:00 アポイ山荘出発 12:00 ランチ、静内ラーメン虎てつ 16:00 千歳空港到着、解散。

1. 13日羽田発 8:15、新千歳着 9:45 のエアドゥ便が機材整備の爲、欠航となりました。1時間以上前の荷物預けの時知らされました。台風ならともかく機材整備？の爲の欠航とは何事かと怒りましたが、整理券をもらってカウンターに呼ばれるまで待つことにしました。同じ便に乗る竹中さん、岡田さんも次々に到着し対応を相談しました。トラブル対応がお粗末で他の便への振替がどうなるか判明しないままいたずらに時間が過ぎました。この日は五色温泉まで移動しないと翌日のニセコアンヌプリの登山が出来ません。

エアドゥ便、共同運航のANA便は本日の振替便がないことが判明した時点では、中村夫妻は一旦帰宅して明日の便、竹中・岡田両氏は山行を中止の悲観的な考えに傾きましたが、スカイマーク便ならまだ空席があることが判明し、羽田発 14:05、新千歳着 15:05 の便に乗ることができました。お迎えの小野さん、手塚さん、予定通り新千歳に到着した佐藤（久）さん、前神さんにご迷惑をおかけしましたが、事なきを得ました。中村夫妻は19日の帯広空港からのエアドゥ便も機材繰りの爲、90分遅れの目に合いました。次回はエアドゥは避けようと思いません。

別表3：前哨戦・延長戦実績

(中村(雅)作表)

本 間	7月11日	東京－米沢－ケーブル駅－米沢－福島（泊）	西吾妻山は中止
	7月12日	福島－仙台－新函館北斗－昆布駅（泊）	
	7月13日	函室閣－五色温泉	イワオヌプリ、ニトヌプリは中止
	7月15日	札幌－空港－札幌－小樽（泊）	塩屋丸山は中止
	7月16日	小樽－札幌－新函館北斗－仙台－東京（帰宅）	※注1、計画詳細は「北海道追悼山行 日程表 6/22」参照 ※注2、山行報告は「2023年7月 蛭川氏追悼と北海道行」参照
中村夫妻	7月17日	アポイ山荘－様似山道東ローコトニに下山、バスでえりも本町（泊）	
	7月18日	襟裳岬観光	
	7月19日	えりも本町から広尾経由、とちか帯広空港へ（帰京）	飛行機が90分遅れの爲、帰宅は翌日 ※計画詳細は「アポイ岳ジオパーク体験プログラム等申込書」参照 ※山行報告は「様似山道」参照
前 神	7月15日	札幌－（佐藤車：前神、佐藤、曲）－浦河－神威山荘－浦河・柏陽館（泊）	
	7月16日	浦河・柏陽館より十勝・白金温泉キャンプ場（泊）	
	7月17日	（佐藤）望岳台から十勝岳往復（前神・曲）	美瑛富士登山口からオプタテシケ（途中で引き返し）
	7月18日	キャンプ場より札幌へ。（佐藤）友人宅泊り（曲）	帰宅（前神）札幌泊り
	7月19日	（佐藤）フェリーにて帰京（前神）	キロロリゾートから余市岳登山
	7月20日	樽前山登山、新千歳より帰京	※計画詳細は「山行計画書（前神）」参照 ※山行概要は上記報告参照
佐藤(活)	7月9日	大洗港前夜発の商船三井フェリー。自家用車と共に苫小牧－新千歳空港－旭川（泊）	
	7月10日	旭川－旭岳ロープウェイ駅より旭岳往復－札幌－小金湯温泉（泊）	
	7月11日	小金湯温泉－羊蹄山真狩登山口－羊蹄山往復	真狩キャンプ場（泊）
	7月12日	真狩キャンプ場（泊）	休養と積丹半島観光
	7月13日	帰京する友人をニセコ駅まで送って前哨戦を終了	※山行報告は「2023年夏の前哨戦」参照
	7月15日	～18日	前神と一緒に行動
曲	7月19日	苫小牧から帰京	
	7月15日	～18日	前神と一緒に行動

2. 今回は連日雨模様・荒天続きに祟られました。北海道山行シリーズは例年、この時期に実施してきましたがこれほどの悪天続きはありませんでした。岡田さんは「地球規模の気候変動の中で、北海道にも梅雨があるということを感じました」と帰京後に、前神さんは緊急連絡先の加藤さんへの下山メールで「北海道に梅雨が来た。今年が初年度？」と述べています。それを受けた加藤さんは「それにしても、この時期の北海道としてはめつたにない荒天に驚きました。」と述べています。ニセコアンヌプリ、アポイ岳は霧雨程度でしたが展望はほとんどなし、墓参りも雨の中でした。お気の毒だったのは意欲的な前哨戦、延長戦を計画された本間さん、前神さん、佐藤(活)さん、曲さんでした。①本間さんは5戦して1勝(ニセコアンヌプリ)、4敗(西吾妻山、イワオヌプリ、塩谷丸山、磐梯山)、②前神さんは延長戦の大本命として狙っていた神威岳、ペテガリ岳は天候悪く登山口まで到達したのみ、しからは十勝に転進し、オプタシケを登らんとするも雨風強く途中で引き返しました。かろうじて札幌近郊の余市岳と樽前山に登りました。③佐藤(活)さんは「ずっと天候不順で、今回4峰(旭岳、羊蹄山、ニセコアンヌプリ、十勝岳)

に登頂したものの、どれも麓からの姿を見ずに終わりました。」と述べています。皆さんの来年のリベンジが成功することを祈ります。

なお、唯一天候に恵まれたのは、中村夫妻が行った「様似山道」です。アポイ岳の翌日は天候回復し青空の下、予定したコースを完歩し、蛭川さんの良き追悼山行が出来ました。

3. 今回のイベントは地元の小野さん、手塚さんに本当にお世話になりました、小野さんには計画案、下見を踏まえての時間単位の行程表、参加費の算定資料、実績取り纏め表など次々に作成していただきました。その迅速・緻密・正確・行き届いた内容に都度感服しました。また、本間さん、前神さんの個人山行へもいろいろ助言されました。

手塚さんには2015年の十勝岳・富良野岳から始まって、2016年の幌尻岳・神威岳、2017年の芦別岳・天塩岳(手前の丸山まで)、2018年の暑寒別岳・小樽&札幌低山まで4年続けて、車運転・山ガイドなど大変お世話になりました。私は2016年からお世話になりました。今回は今までで最長の5日間同行していただき、9人乗りレンタカーを手配&運転して

いただきゆったり快適に移動できました。それと皆が感激したのは五色小屋でいただいた手巻き寿司&冷たい生ビールでした。過去、十勝岳、神威岳の時も生ビールを用意していただき、その時の山行幹事だった故宮武君が会報に感激したこと書いています(注2)。今回初めてその恩恵に預かった前神さんは、帰京後のメールで「話には聞いておりましたが、手塚さんがあそこまですべて段取りされるとは想像を超えておりました。まさか生ビールまで用意していただけるとは本当に驚きです」と述べています。

(注2) 『針葉樹会報』第134号 「十勝岳・富良野岳行」 宮武幸久  
『針葉樹会報』第137号 「幌尻岳・神威岳行」 宮武幸久

### 【山行報告】

本山行の報告は中村が①全体報告(本稿)、②ニセコアンヌプリを竹中さん、③アポイ岳を佐藤(久)さん、④前哨戦(旭岳・羊蹄山)を佐藤(活)さん、⑤延長戦の様似山道を中心、⑥余市岳・樽前山を前神さん、⑦神威山荘から美瑛富士までを曲さんが担当しました。また、⑧本間さんがご自身の山行全般の報告を書かれました。

## ニセコアンヌプリ登山

竹中 彰（1964年生）

ニセコアンヌプリは2006年9月に三月会イベントでニペソツに向かった際に愛山温泉から当麻乗越を往復し、他のメンバーを新千歳に見送った後に蛭川さん共々延長戦で小野さんのお世話でニセコ界隈に遊んだ時にイワオヌプリと併せて登り（この時には目国岳麓の新見温泉に投宿、山を望む深く、大きな露天風呂でビールを飲んだことも思い出される）、その次は矢張り小野さんの企画で2009年2月の恒例の北海道スキー行に参加した際に、ニセコのリフト終点からシール登行を交えて頂上を踏んだことがある等の思い出の山だが、今回は蛭川さんの追悼も兼ねて、アンヌプリを訪れる恐らく最後の機会になるかとの思いも込めて、針葉樹会の仲間と頂上に向かった。

メンバー：竹中彰（1964）、本間浩・小野肇（1965）、佐藤久尚（1966）、岡田健志（1967）、中村雅明（1968）、玖美子、前神直樹（1976）、佐藤活朗（1

978）

7/14（金）

前日東京出発時に運航トラブルでつまずいたが、五色温泉に何とか辿り着き、前夜の饗宴にも参加し、快適な気温条件で熟睡した。目覚めると横に寝ていた本間さんの姿はなく、雨戸を開けて外を見ると、目の前のニセコアンヌプリの上部は雲が湧いているが、切れ目から朝日が射し、何とか登頂に期待が持てる天気にもホッとする。使用するザックの内容確認や身支度を整えて階下の食堂に行く

と、メンバーは概ね朝食を済ませたところであった。食後は立つ鳥跡を濁さずとごみの分別、片づけを行い、出発に備える。外に出ると先ほどの日差しは消え、細かな雨が落ちていくが傘でカバーできる程度だった。

全員揃って200に宿の前を出発し、道道58号を渡ってニセコ野営場の一角を通り西尾根登山口に出る。入口横には入林届のポストが設置され、中にはノートが置かれていた。

小野さんをトップに進むが、登山道は前日の雨模様で滑り易くなっており、嘗てのトムラウシ登山の際のカムイ天上からコマドリ沢分岐に至るネマガリタケの間の泥濘の道を思い出させるが、こちらの方が全体に傾斜もあり、岩・石混じりなのでそれ程苦労す

ることはなかった。見返り坂分岐（855m）で最初のピッチを切る（8:18:25）。

振り返ると登って来た温泉の上部にイワオヌプリ、ニトヌプリ等の山の下部が望め、スキーシーズンの好斜面が想像された。

なお、笹の間を登り少し開けた地点で右手に上がると昭和35年の北大WV部員遭難鎮魂碑のプレートが埋められたケルンで一休み（8:41:55）。頭上は曇りがちでスッキリしないが、標高を上げるに従って四囲の山裾の景観が広がってくる。

その後も暫くは笹の間を辿り、漸く視界の利く尾根上に出て地図上の1065m地点でピッチを切る（8:54:25）。次のピッチはダケカンバに囲まれた石畳状の道となり、時々姿を見せるトリアシショウマ（ヤマブキシヨウマ？）、オトギリソウ、トモエシオガマ、チシマフウロ等の花々に癒されながら登っていく。



2023.7.14 イワオトギリ  
撮影：岡田健志



2023.7.14 チシマフウロ  
撮影：岡田健志



2023.7.14 ゼンテイカ咲く稜線を行く 撮影：岡田健志

九十九折れの道を進むとガレた斜面にとび出した。この辺りにはチシマフウロ、ニッコウキスゲ（エゾカンゾウ、ゼンテイカとも）等の花も多く、傾斜の強まった斜面ではあるがそこそこに咲く花を探しながら岩に標されたマークに沿って登る。その後は斜面をトラバース気味につけられた登山道で標高を200m程稼ぎ、歩き難いハイマツと岩の道に出て頂上避難小屋が見え隠れする中を最後にアンヌプリ頂上看板に到着した（10:45-11:10、

1308m）。お目当ての羊蹄山は遥か雲の中であり、麓の倶知安町などもガスが去来する中で視界は利かなかった。

昼食後、頂上周辺の花を観察したり、全員の写真撮影、避難小屋内部のチェック、小屋の後ろのニセコ観測所跡の記念柱\*等を観察したりと時間を潰した。以前は気が付かなかった島崎藤村の「惜別の歌」の歌詞のプレートを見つけたが、何故こんなところに置かれているのかは不明。

\*2006年12月日本気象学会出版物「ニ

セコ山頂着氷観測所」菊地勝弘（秋田県立大）より抜粋

：それは単に今では多くの人がスキーマのメッカとしてしか知らないこの山頂に、着氷観測所というあまり聞き慣れないユニークな観測所があったという事実、雪の博士として著名な北大理学部中谷宇吉郎教授が主導して行われた実験であったというほかに、この小さな平和な町にもあの忌まわしい戦争と結びつくものがあつたという事実を風化させまい、ということもあつたであろう。主翼は2004年6月回収され、2005年12月から常設展示されている。・・・

頂上には数パーティーが登って来ていたが、



2023.7.14 ニセコアンヌプリ頂上にて 撮影：岡田健志

ガスによって下界の展望が遮られていることもあり、余り長居することなく下って行つた。多くはゴンドラ方面に向かう様子であった。我々は来た道を五色温泉に向けて、登る途中で見かけた花を再確認する等ジックリ観察し、撮影しながら下つた。3ピッチ1.5時間野営場駐車場に到着し、車を回して待機していた手塚さんの出迎えを受けた。同時に、

昨夜完飲できなかった生ビールもサーバー付きでセットされており、有難く喉を潤した。14時過ぎに五色温泉を後に札幌に向けて出発した。この先は手塚さんの運転に任せて、我々は札幌までのドライブを楽しむのみであった。

駐車場を出て道道58号をチセヌプリスキー場方面に下った先に、地熱発電用の試掘中にヒ素濃度の高い温泉が噴出した蘭越町の現場横を通過しながら見物した。途中で高速道に乗って小樽の山側を通過し16時過ぎに東横イン札幌南口店横に到着し、18:30からのすすきの「くしどり番外地」での懇親会参加まで、各自入浴その他フリータイムとして過ごす。

18時過ぎにホテルロビーからすすき野に向かう。乗り慣れない地下鉄の路線を間違えるハブニングもあったが、無事に会場に到着し、紀巳子夫人、札幌在住の曲君らと合流し、追悼懇親会が始まった。小野さんの司会、夫人のご挨拶などで宴が進み、飲み放題、鳥尽くしで堪能して21時過ぎにお開きとなった。帰路は順調にホテルに戻り、翌朝のロビー集合8時を確認して部屋に戻り荷物パッキングなどを行って就寝した。

今回の山行に当たっては、現地で諸事企画、詰めを頂いた小野さん並びにドライバー、

シエフとして大活躍頂いた手塚さんには感謝の言葉しかない。

## 旭岳と羊蹄山

(2023年夏の北海道・前哨戦)

佐藤 活朗(1978年卒)

これまで私の北海道の山経験は、40年前の故大塚武氏遭難時に捜索隊メンバーとして頂上まで行った日高神威岳と十年程前の残雪の羅臼岳だけ。要するにこれまでほとんど縁がなかった。今回針葉樹会一行の北海道行に加えていただく機会に、前乗りしてあらためて北海道の山に入門することにした。

大洗から船旅を楽しみ、7月9日昼過ぎ、苫小牧にマイカーと上陸し出発。新千歳空港で高校以来の山友の青木を乗せ、当日は旭川のビジネスホテル泊。

10日 晴のち曇り 810旭岳ロープ

ウェイ上駅を歩き出し、1030旭岳頂上着。雲が去来し、大雪連峰の眺望は途切れ途切れ

だが楽しめた。

下りで調子に乗って先行し、上駅まで30分ほどの緩い岩の道でつまずいて前のめりに転び、右膝・側頭部を打撲。幸い歩行に支障はなかったが、北海道を去るまで膝に痛みが残った。また、今回の私の北海道10日間でなんとか晴れたのは結局この日だけだった。

12時に上駅に戻り、ロープウェイで下り、翌日の羊蹄山のためにまた車で移動。この日は札幌の郊外にある小金湯温泉(まつの家)に泊まる。ここはすぐ先の高級感がある定山溪温泉に比べ宿代が手頃、しかも締切直前の「北海道LOVE割り」を利用できてたいへんお得だった。

7月11日 曇り／雨

宿を出たのが既に730。羊蹄山の真狩登山口まで50キロ、それに中山峠の長い下り坂で数台前の車が自損事故を起こし救援したため、歩き出したのは930と遅かった。すぐにポツポツ降り出し、雷の予報があったので、引き返すか迷いながら樹林の中をひたすら登る。昼前に雷鳴が聞こえたが、次第に遠ざかりやがて聞こえなくなったので続行する。下ってくる先行者の話のとおり、森林限界を抜けると風雨が強くなり、気温は高目で寒くないけれどメガネに水滴がつき、足元が見

えにくくて困った。

お釜の縁に達して右に進み、頂上手前で予想していなかった（予習不足！）複雑な岩場の通過に30分以上かかった。15時に頂上に着き、風雨のなか写真を撮りすぐ下りにかかる。途中目に映るたくさん的高山植物を鑑賞する余裕もなく、1830二人ともヨレヨレ状態で登山口に帰着。

同夜からその気持ちの良いキャンプ場で二泊し、休養と積丹半島観光。かねてから北海道のキャンプ場の環境の素晴らしさを聞き及んでいたので、今回の山巡りでは経費節約も兼ねキャンプ場を活用するつもりで、道具も車に積んできた。この日から13日五色温泉に着くまでずっと曇り／雨だったが、大きなタープを張ったので快適だった。

今回の北海道山巡りでは幸い四座（上記二座十二セコアンヌプリ、十勝岳）に登れたものの、ずっと雲で覆われて麓から山の姿はひとつも見ることができなかった。できれば来年も船に乗って、晴れの北海道の山に見参りたいものです。

2023年7月

## 蛭川氏追悼と北海道行

本間 浩（1965年卒）

7月11日（火）西吾妻山

米沢駅に着いた時は青空で、天気予報も間違ったナと思えばスでケーブル駅に向かった。山に近くなるとパラパラ降り出し、道路には水溜りが数ヶ所見られる。10時頃ケーブル駅で山の状況を聞いた処、「山は大分荒れていて、雨風が強い。午後はカミナリがあるかも知れない、その場合はリフトが止まります」と。登山口の北望台までは、ロープウェイとリフト3台を乗り継ぐ。登山後半部は岩勝ちで単独行者には雨だけでも怖いのに、それに風とカミナリでリフトが止まっては中止が当然。帰りに、謙信・景勝・鷹山を祀る上杉神社に寄る。帰り掛けた時突然の豪雨に見舞われ、東屋に避難、30分程して小降りになった処でタクシーを拾い米沢駅に向かう。

6月の「米山」に続くリベンジ行第2弾であったが、私の顔も三度迄、西吾妻は諦める。

7月12日（水） 移動（福島駅↓仙台駅↓新函館北斗駅↓長万部駅↓昆布駅）

7月13日（木）イワオヌプリ

俱知安駅からタクシーでイワオヌプリの登山口であり、本隊との集合場所でもある五色温泉旅館に向かうが、途中からも雨で、旅館で昼まで様子を見る。雨は止まず視界も悪い。休火山の山頂は岩石砂漠で迷いやすい為登山は中止する。その後は、古風な風呂を頂き、（佐藤）活朗さんの今山行の戦歴を伺い本隊到着を待つ。夜は手塚さんの手巻き寿司と蕎麦で盛り上がった。

尚この山は蛭川さんの息子さんが勤めている北海道新聞発行の「トレッキング入門」に載っていたので一度登ってみたいと思っていた。ニセコ地区の羊蹄山は北海道シリーズで佐藤さん佐藤久チャンと登っているし、明日はニセコアンヌプリに登る予定なので、来年はニトヌプリも加えてリベンジです。

7月14日（金）ニセコアンヌプリ

晴れと迄はいかない曇り空。岩勝ちの路だったがユックリだったので特に問題もなく登る。尤も山頂手前の岩の伝い歩きは緊張、滑って転んで骨折するのは老人の最も忌む処。途中小野さんに、晴れ間に見えたイワオ



2023.7.14 イワオヌプリ（ニセコアンヌプリへの登山路から）  
撮影：岡田健志

ヌプリ方面を案内して貰う。リベンジ戦の意欲がイヤ増す。

山頂では食べて・吸ってノンビリ過ごした。残念だったのは、羊蹄山を拝めなかった事。山頂の一角に辿り着いたが強風の為直ぐに降りた、あの山の大きな姿を見たかった。

### 7月15日（土）塩谷丸山

この山は2〜3年前、蛭川さんと北海道の南の山々（ニセコの山 塩谷丸山）を話し合っ

た時、「塩谷丸山なら俺も登れる」、「ジャア是非一緒に行こう」と言葉を交わした、小生にとって彼の追悼には一番相応しい山、「登らねば！」の山です。

朝の天気予報によれば小樽方面は雨とのこと。不案内な山故、先達が欲しいが、この雨では期待できないだろうし、この山だけは晴れた日に登りたいと思い、登山は取り止める。東北地方も日本海側は大雨の予報が出ている為、翌日の登る予定の磐梯山は猪苗代湖側からは登っていて、今回は大噴火の有った裏側から登ろうと計画。ただ湿地帯を歩くことになるので、これも中止。ホテルをキャンセルし、帰りを1日早める。

午前は蛭川さんの墓参、午後は東京に帰る竹中さん岡田さんと空港で時間を潰し2時過ぎに小樽に向かう。空港で沢山頂いたのでホテルの外に出る気も無く熟睡。

7月16日（日）移動（小樽駅↓札幌駅↓新函館北斗駅↓仙台駅↓東京駅）

### 総括

・低いとは云え生易しくない初見の北海道の山々

・弱卒にして高齢者の単独行

・「天気予報はアテにならない」をアテにし

た、晴れ期待の山行

今回の山行諸状況（対象・当事者・気象）を簡単に言えば以上ようになります。

5戦して1勝4敗。無残やナ、残念と言いたい処ですが、

・蛭川氏の墓参ができた事

・ニセコアンヌプリに全員で登れた事

目的の「墓参と山」は、ひと先ず達成。

ザッツ ア プレンテイ！

とは云え、悔しさは残り20〜21日と丹沢・塔ノ岳に行こうと用意万端整えた処、19日夜左足首が腫れ、歩くにママならぬ状態。7月の山、は ツイテイマセン。

来年アラアな？

（2023.7.25）

### 山行記録―アポイ岳

佐藤 久尚（1966年卒）

### アポイ岳とは

アポイ岳は日高山脈の南西端に位置する標高810.6mの山で、約1,300万年前の

プレートとの衝突によって地下数10kmにあったマントルが上昇露出したとされる「幌満かんらん岩体」により構成されている。独特な地質条件と過激な気象条件が重なり低山ながら2,000m級の山に相当する山様を呈し、アポイ岳にのみ生育するヒダカ草などの固有植物が生育している。また、この山には日本でここにしかないヒメチャマダラセリという天然記念物の蝶も生息している。(「アポイ岳ジオパーク」のホームページ等より抜粋)

山の名前は「アペ・オ・イ火のあるところ」というアイヌ語に由来する。アポイ山荘のスタッフの方から、「昔この辺りには鹿が沢山いたが、ある時突然いなくなったので、アイヌの人々が山頂で火をたいて鹿が戻って来るのを祈った」という伝説があることを聞いた。

この山については2012年7月に針葉樹会員7名(佐藤、蛭川、竹中、本間、小島、岡田、佐藤久)と静内山岳会の会員3名でトムラウシと黒岳・旭岳に登ったが、その際、佐藤、蛭川、本間、岡田さんの4名が延長戦として足を延ばした経緯がある。その時、私は予定がありアポイ岳行きは見送ったが、後でアポイ岳の特徴等を知るにつれ残念に思った記憶がある。小島さんもこの時アポイ岳行

きを見送ったが、多分、私と同じ想いを抱いていたのではないか。今回「アポイ岳に行く」と最初に声を上げたのは小島さんだった。

#### 参加者

小島(1965)、小野(1965)、中村雅(1968)、中村夫人、佐藤久(1966)、手塚

(手塚さんは、小野さんの北海道電力山岳部の後輩。過去に幌尻、神威、十勝、芦別岳などへの山行で何度もお世話になったが、今回も車の運転や食事の世話などで、大変お世話になった。)

#### コースタイム(中村氏の記録を転載)

アポイ山荘発(6:58) — アポイ登山口(7:07) — 第2休憩所(7:55~8:09) — 第4休憩所(8:22~8:32) — 五合目避難小屋(9:11~9:27) — 馬の背(10:31~10:50) — 八合目(11:22~11:28) — 頂上(11:58~12:28) — 馬の背(12:50~13:00) — 五合目避難小屋(13:32~13:38) — 登山口(14:48) — アポイ山荘(15:20)

#### 行動概要

7月15日、故蛭川さんの墓参の後、別行動となる竹中、本間、岡田さんの3名を真駒内駅でおろして、手塚さん運転の車でアポイ山

荘に向かう。

道は日高厚賀インターまでは高速道で、そこから国道235号線に入るが、この国道は右側に太平洋、左側に緑の牧場が開けていて景観がすこぶる良い。また途中、静内や浦河、新冠の市街を通るが、その町の様子(7年前、神威岳からの帰りに通った時に比べいずれも活気を失っているように見えた)や、廃線となった日高本線の駅跡などが見られて興味が尽きない。新冠の道の駅で小野さん推奨のラーメンを食べて、15:00、アポイ山荘に着いた。アポイ山荘には温泉があるのでうれしい。

7月16日曇り。朝食のサンドウィッチで腹ごしらえをした後アポイ山荘を出発。昨日、車で上って来た自動車道路をビクターセンターに向かって戻るように坂を下る。ビクターセンターの駐車場の横が登山道の入り口。小野さんを先頭に小島、佐藤、中村夫妻、手塚さんの順で隊列を組んで歩き出す。しばらくは立派な舗装道路が続くが、ポンサマシベツ川の橋を渡って少し行くと舗装が途切れ林道となり、さらにその先で細い登山道になる。ミズナラやヒダカゴヨウマツなどの広葉樹と針葉樹の混生した樹林帯の中を行くと「二合目」の標識に出会う。以後この合目標識に背中を押されるようにして登る。道は緩や

かな登りで、所々にベンチを備えた休憩所もあつて、避難小屋のある五合目（森林限界でもある）まではそれ程苦も無く登れた。しかし問題はその先にあつた。五合目を出ると胸突き八丁の急登が待つていた。岩場の道をあえぎながら登ると上方に大きな石が積み重なつてできた瘤のような地形が見えてきた。近づいてみると「毒蛇注意」と書かれた看板が立っているではないか。手塚さんに聞くと北海道にもマムシはいるそうで、毒蛇というのはマムシのことらしい。しかし、マムシを毒蛇と書かれるとオドロオドロしい感じが増して、へび大嫌いな人間の私には、何かマムシとは異なる恐ろしい蛇が瘤岩の裂け目から出て来るのではないかとすら思えてしまう。登山道の入り口には「熊注意」の看板が有り、また登山道には所々に熊よけの釣り鐘が設置されていたので熊がいることは分つていたが、熊のほかに毒蛇までいるとは驚いた。アポイ岳は花の山などと唄つているが、実はクマや毒蛇のいるヤバイ山なんだと認識を改めさせられる。さらに登ると七合目の標識を過ぎて尾根の上に出た。そこは馬の背というところで、晴れていれば太平洋や日高山脈の山稜が見渡せるはずであるが、この日はガスに囲まれ全く見えない。しかし休憩を取るには絶好の平坦で開けた場所なので、長めの休憩

を取る。ここで、小島さんと小野さんは「これ以上行っても眺望が望めないだろうからここで止める」と言つて、引き返すことになつた。その為、ここからは中村夫妻、手塚さん佐藤の4人で頂上を目指すこととなつた。馬の背から岩稜を縫うように登つて行くとお花畑コースと直登コースの分岐点に出た。これまで期待したほどの花が見られなかつたので、お花畑コースを行くことにする。佐藤先頭で進む。このコースは最初は水平のトラバース道であつたが、進むに連れて道は下り勾配となりどんどん下つて行くように見える。このまま進んで大丈夫かなあと心配していると、手塚さんから「戻りましょう」と声が掛かり引き返す。結局、分岐点まで戻り直登コースを登ることにしたが、この間約15分をロスした。

直登コースは岩場の段差の激しい登りで息が切れる。中村夫妻に遅れまいと必死に付いて行こうとするがどうしても離されてしまう。途中から諦めて自分のペースで行こうと決め、前を見ないで専ら足下だけを見て歩く。地面にはカンラン岩の破片だらう、断面が紫色のガラスのような光沢のある石が沢山落ちている。これらはプレートとの衝突によりマントルが地表に押し出されてきたもので、地球の歴史の証人とも言えよう。手に取つてみると普通の石より重い感じがした。

岩場の道を抜け再び樹林帯に入ると最後の登り。中村夫妻に遅れること5分程度で頂上に着いた。頂上には一等三角点と小さな社があつた。アポイ岳の頂上は樹林に覆われていて眺望は無いとは聞いていたがその通りで、ちよつとがっかり。頂上で写真などを撮つていると帯広から来たという中年の男性が話しかけてきた。この人はアポイ岳には何度も登つているようで、アポイの植生やアポイから見える景色などについていろいろ説明してくれ、そのうえスマホで撮つた写真まで見せてくれた。写真には、晴れていれば九合目辺りで我々も見られたであろう、様似から浦河に続く海岸線と太平洋が一望できる景色が写つていた。

頂上には30分ほど滞在して下りにかかる。下りでも中村夫妻に大分引き離されたが、終始後ろから手塚さんが着いて来てくれるので不安は無い。中村夫妻に大分遅れてビジターセンター前の登山口に着いたが、中村夫妻は律儀にも待つて居てくれた。5:15、4人揃つてアポイ山荘に帰着、往復約8時間（往5時間、復3時間）の山行を終えた。

山荘に着くとフロントに「小島さん小野さんはお風呂にはいつている。」との伝言があつたので、着替へとタオルを持つて浴場に直行、

温泉で汗を流す。その後、休憩室で一足先に一杯やっていた小島さん小野さん手塚さんにジョインして生ビールで乾杯。山、温泉の後の生ビールは最高で、至福の時を過ごした。

### 登山後の行動

7月17日朝、様似山道に行くという中村夫妻を小野さんと手塚さんが車で送って行く。(小島、佐藤はホテルの玄関でお見送り)手塚車は30分程で戻って来たが、今日は時間がたつぷりあるので、アポイ山荘で少し時間をつぶし、ゆっくりと9時半過ぎに山荘を出る。途中、一橋出身の作家、白川道(トオル)氏が書いた小説「天国への階段」の舞台となった絵笛という所(地名が何とも美しい。景色も一面牧場が広がっていて小説の舞台にふさわしい)や新冠のレコード館などに寄って時間をつぶし、14:40、新千歳空港着。小島、佐藤はここで小野さん手塚さんと別れて17:00発のANA便で帰京した。

今回も小野さんと手塚さんには本当にお世話になった。感謝の言葉も見つからないが、本紙上を借りて改めてお礼を申し上げます。

### 花と蝶

アポイ岳は「花の百名山」にも挙げられているが、正直、失望した。五合目より上の岩

場には所々に赤や、白、黄色、紫色の小さな花が咲いていたが、種類も少なく、咲き方もポツン、ポツンという程度で、お花畑など無い。どこが百名山なのか、事前にイメージしていたものとあまりにも違うので、帰宅後、ネットで調べてみた。その結果、アポイ岳には固有種の草花が多く生息するので、花の百名山に選ばれたということが分った。検索してみるとアポイアザミ、アポイマンテマ、アポイキンバイなど「アポイ」という名を冠した植物が10指に余るほど検索でき、「花の山」お花畑」とイメージしていたことが誤りであったと気付かされました。



アポイアズマギクから吸蜜するヒメチャマダラセセリ  
撮影：永盛俊行 [hokkaido-lepi.com/diary/286/](http://hokkaido-lepi.com/diary/286/)より

天然記念物の蝶ヒメチャマダラセセリは見ることができませんでした。しかし先に下山した小島さん小野さんが途中で会ったパトリールの人から次のような話を聞いた。

「ヒメチャマダラセセリは一時絶滅の危機に瀕したが、様似町やボランティアの団体が町のセンターで孵化した幼虫を餌となる草(キンロバイ)に移して袋掛けして保護した結果、幼虫は今では個体の自然増殖が可能な200匹以上に増えた。」

そう言えば、アポイ岳の五合目から上のハイマツ帯で、何かをポリ袋で包んだようなものを所々で目にした。あれは一体何だろうと思っていたが、小島さん小野さんの話を聞いて、ヒメチャマダラセセリの幼虫を保護している袋掛けだと分って、疑念が解消した。来年の5、6月頃にはきれいな蝶が見られることを期待したい。

### 神威山荘から美瑛富士まで

曲 文琛(2018年卒)

メンバー：前神直樹(1976)、佐藤活朗(1

978)、曲文琛

7月15日 雨 札幌↓神威山荘↓柏陽館

蛭川氏のお墓参りを終え、我々ペテガリ組は滝野霊園をあとにして浦河へ向かう。小野先輩の助言を得て、渡渉の多い神威岳を諦めて尾根歩きがメインとなるペテガリ岳だけに登ることにしたのだが、16日と17日どちらも雨予報が出てしまい、先行きが心配だ。

静内で買い出しと昼食を済ませ、浦河の宿泊施設「柏陽館」経由で登山口へと続く林道に入る。荒廃気味の納屋がぼつんと一軒だけ寂しく建っており、牛たちが雨の中で悠然と牧草を食べていた。舗装路が次第に砂利道に変わり、標高を上げるにつれ、地形も日高らしい険しさを見せてくる。山側で崩れかかっているところも何か所あり、それを回避しようとガードレールのない谷側に寄せると、ガスで底が見えない峡谷は覗くだけで眩暈がする。佐藤さん曰く、本州ならこのような危険な林道を一般車に開放するのはまず考えられないという。

対向車が来る。話してみると、東京からペテガリ岳を狙いに来たが、大雨で林道がいつ崩れてもおかしくない状況のため登山を断念したという。頑張れば何とか登れるんじゃないかなと微かな期待を抱いていた我々もこれ

を聞いてさすがに落胆した。

1時間半以上も林道を走り、ようやく景色が開けて神威山荘に到着。先着の車は一台止まっているが、人の気配がない。入林届を調べても、六月下旬を最後に入山記録が途絶えている。

雨は止むどころか、さらに勢いを増そうとしていく。退路を心配しては山を楽しめるはずがないと自分に言い聞かせ、我々も中止することにした。帰り道で車一台とスライド、やはり関東からのペテガリを狙う登山客



2023.7.15 神威山荘 撮影：曲文琛

である。彼らは林道崩壊のリスクについては特に心配する様子はなく、登山を続行するという。

急遽な予定変更だったため、今夜の宿泊先はまだ決まっていない。とりあえずダメもとで林道手前の柏陽館に聞いてみる。さすがに急すぎる話で管理人さんも難色を示すが、とうとう前神さんの粘り強い交渉に負けてしまい、施設の宴会室を一泊2200円の超格安価格で貸してくれた。10人くらいなら余裕で泊まれるような大広間を我々三人で貸し切りする。なんとという贅沢だ。おまけに大浴場使い放題、室内でのコンロ使用OK：もう最高としか言いようがない。心優しい管理人さんとあきらめの悪い前神さんに感謝。お風呂に入つて、ビールと鶏鍋と「山話」を楽しんだのは言うまでもない。(佐藤さんのスモークサーモンが絶品だったということだけ特筆しておく。)

7月16日 雨のち曇り 柏陽館↓白金国設

野営場

朝は霧雨。ゆっくりと朝食をとった後、柏陽館を後にした。襟裳岬へと続くこの海沿いの国道は何度も車で走ったことがあり、あの強風にあおられて碎ける高波の姿にはいつも心奪われるが、今日の海はより一層荒々しさ

を増している。富良野に近づくにつれて天気  
が徐々に回復していき、次第に雲の隙間から  
空の青さが覗けるようになる。十勝連峰はな  
おガスがかかっており中腹より上の山肌は見  
えない。

白金国設野営場に到着。佐藤さんが長年愛  
用してきたテントとタープのおかげで快適な  
キャンプができそう。晩御飯は富良野から  
調達したジンギスカン。佐藤さんが仕事で滞  
在したイストラム圏の国々の話や、前神さんの  
日高山脈縦走の話が非常に面白く、おいしい  
焼肉と相まって、キャンプの夜を存分に楽し  
めた。

7月17日 雨 白金国設野営場↓美瑛富士  
登山口↓美瑛富士避難小屋↓白金国設野営  
場

四時頃起床。朝食後、佐藤さんが単独で十  
勝岳に向かい、我々はオプタテを目指す。連  
日の雨のせいで、道のコンディションが最悪、  
登りだしてまもなく足もズボンも泥だらけに  
なる。

1.5時間ほどで大きな岩が積み上がって  
いる「天然庭園」に到着。天然庭園を通過す  
ると、一面に広がるチングルマの花畑が現れ、  
悪天でもやもやとした気持ちを清々しくして  
くれる。稜線直下ではいくつかのグループと

スライドする。どうやら稜線上の天気が荒れ  
ているらしく、皆山頂を諦めて下りてきたら  
しい。

稜線に出たとたんに、やはり風雨が一気に  
強まり、さっきまでの小雨が土砂降りに変  
わっていった。小屋に入って休憩をとる。小  
屋の近くでナキウサギたちの鳴き声が響いて  
いた。時間はまだ早い、山頂はまだ遠く、  
景色も全く期待できそうにないため、下山す  
ることになった。

天然庭園を再び通過したとき、ガレ場から  
一匹のナキウサギが小さな頭を出して、かわ



2023.7.17 チングルマのお花畑 撮影：曲文琛

いらしい円らな目で我々のほうを見ていた。  
カメラを出す前に逃げられたが、ナキウサギ  
の姿を自分の目で確認できたのは5年前のト  
ムラウシの時以来なので、非常にうれしく、  
眺望がゼロでも報われた気分になった。

前神さんから色々山にかかわる面白いお  
話を聞く。昔の某大学山岳部はニワトリを山  
に連れていき、合宿中毎日卵を産ませては食  
べ、そして合宿最終日にしめて饗宴に供した  
という。その手もあつたのか!!と感心する。

美瑛富士登山口まで下りて、富良野での買  
い出しから帰ってきた佐藤さんと合流し、  
キャンプ場に戻る。距離はたいして長くはな  
かったが、道が悪いせいでだいぶ疲れた。靴  
とズボンは泥まみれで見事に堪えない。佐藤  
さんは強い風雨の中で見事に十勝岳登頂を果  
たしたという。

下山後の宴会の最中に夕立が雷とともにも  
のすごい勢いで降り出した。もし登頂を強行  
していたら今頃間違いなくこの雨にやられて  
いた。

7月18日 雨のち曇り 白金国設野営場↓  
札幌

最終日は道央自動車道で札幌へ向かう。今  
回は残念ながら狙っていた山のいずれも登頂  
することができなかったが、連日の宴会三昧、

キャンプと「山話」で実に楽しい三日間を過ごせた。

一週間も続いた雨は、梅雨がないと言われてきた北海道ではやはり異常事態で（そしてこの記事を書いている8月下旬現在、日中の最高気温が35度をも超え、かつじめじめとした猛暑日が一週間も続いている）、温暖化の影響はもはや侮れない。今の経済、今の暮らし方を呑気に続けていけば、「楽園」だと思っていた北海道どころか、地球上から安住の地はやがて消えていくだろうと、つくづく思う。

今回登れなかったペテガリ岳だが、やはり昨年の骨折によるケガを完治させ、来年以降万全な状態で挑みたい。来年の夏までリハビリに励みながら諸先輩の来道をお待ちしている。

## 様似山道

中村 雅明（1968年卒）

様似山道は、日高耶馬溪の断崖上に続く山道で、1799（寛政11）年に江戸幕府によって北方警備の増強を目的に開削された北海道

で最古の官営道路の一つです。全長約7kmです。1869（明治2年）になって、電話線の爲に電電公社が手入れをしたことがあっても街道の整備がされなくなり、更に1891（明治24）年の海岸線のトンネル開通後は忘れられて廃道となっていました。美しい花が多く見られる道として知られるようになり、30年ほど前に復活してハイキングロード（フットパス）となりました（注1）。

この山道は故蛭川先輩と2019年7月に家内と3人で礼文島トレイルの8時間コースを歩いた時に教えていただきました。そのコースは礼文島北端のスコトン岬手前の浜中を出発し、宇遠内を経由して香深井へと至る礼文島西海岸を南北に縦断する全長16.5kmのコースです。蛭川さんにとっては最後の長距離コースになりました。初日の浜中の宿で、「来年の7月の北海道は『雨竜沼湿原とアポイ岳』を考えています」と話したら「アポイ岳の後、『様似山道』がお勧めです」と様似山道の事を一から教えていただきました。蛭川さんは2012年にアポイ岳を登った後、アポイ岳ファンクラブに入会され、アポイ岳でガイドしていただいた田中正人氏（ファンクラブ会長、会員として活躍されている様似町商工観光課の田村裕之氏と親交がありました）。

何年だったのか聞き忘れられました（2016年？）が、ファンクラブ主催の様似山道ツアーに参加した話を聞かせていただきすっかり行く気になりました。2020年初に「雨竜沼・アポイ岳・様似山道」の日程を蛭川さんに送りましたが、すぐにアポイ岳のパンフレットと一緒に様似山道の資料を沢山送っていただきました。その中の北海道新聞の記事（2016年10月19日）「ぶらたび…様似山道を歩き昔の旅人と思う」に心惹かれました。田中正人氏の案内で歩いている記事なので、家内のことも考えてガイドを頼むことにして蛭川さんに仲立ちをお願いしました。蛭川さんが早速、田中、田村両氏にガイド依頼出来るかの打診メールを送り、田村氏から田中&田村両氏がガイドをお引き受けしますのお返事を頂きました。様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会宛での申込書で正式にガイド依頼しました。ガイドの内容は地層・岩石・鉱物、植物、歴史で、コースは東口〜西口全部でなく、バス停に近く、えりも岬に向かうバス時刻も考慮して西口の1時間手前のコトニに下山（東口から4時間）することにしました。4月半ばになって飛行機、雨竜沼の宿以外の宿泊先の予約を済ませましたが、雨竜沼の宿はコロナ禍の爲、宿泊不可となり、計画全体を翌年同時期に延期しました。ところが翌202

1年もコロナ終息せず翌年に延期、さらに2022年は蛭川さん、小島さんの体調不良から3年続けて延期しました。今年、4年振りにアポイ岳登山の翌日、家内と2人で山道歩きが出来ました。ガイドはずっと対応していただいた田村氏です。ガイド料は2人で12,000円です。

(注1) 様似町役場編「まさに さつまに area 302」北海道新聞2016年10月19日」

### 【コースタイム】 7月17日：

アポイ山荘 (8:30) ≡ ≡ ≡ 幌満コミュニティセンター駐車場 (8:45～9:00) → ピラオンナイ沢途中 (9:30～38) → 峠 (9:58～10:05) → ルランベツ沢先 (10:53～58) → 展望台 (11:08～14) → 原田宿跡 (11:38～12:10) → 尾根台地 (12:38～47) → コトニ登山口 (13:45～14:15) → コトニ・バス停 (14:20～29) ≡ ≡ ≡ えりも岬 (15:10～18:04) ≡ ≡ ≡ 新栄 (18:21) 田中旅館 (泊)

### 【行動概要】

ガイド田村氏との集合時刻 9:00 に合わせて(余裕をもって)アポイ山荘を8:30に出発しました。

山荘で小島さん、佐藤(久)さんとお別れの挨拶をして、手塚さん運転のレンタカーで

小野さんも一緒に様似山道の東側登山口近くの幌満コミュニティセンター駐車場に向かいました。8時半前に旧幌満小学校の校庭駐車場に着きました。ほどなく田村氏到着し、小野さん・手塚さんに紹介した後、お二人にお別れました。今回は本当にお世話になりました。スパッツを付けたらザックの整理をして9:00に出発しました。



2023.7.17 様似山道入口 撮影：中村雅明

昨日と違って久しぶりの晴天です。家内の不安はニセコアンヌプリ、アポイ岳はサブザックで登れたのに、今日は荷物全部を背負って歩けるか？です。幌満バス停にある、山道開削に地元民として尽力した「齋藤和助」を祀る和助地蔵に立ち寄り手を合わせました。幌満川右岸に入山ポストのある登山口からすぐにピラオンナイの小沢沿いを登ります。

踏み後も不明瞭でガラガラした小石の沢歩きに慣れていない家内は苦労します。雨の後に水量もいつもより多いとのことでした。約30分歩いた頃、立ち止まり「荷物が重くてつらい」と訴えました。それを目ざとく見つけた田村氏がすぐ休憩をとり、次のピッチからザックを交換し、下山口まで家内のザックを背負ってくれました。そのお蔭でその後は遅れず歩きました。本当に有難かったです。沢が終わると明瞭な山道が峠まで続き楽になりました。

次のピッチが山道隋一の難所、ルランベツの沢でした。沢に下りる道幅は徐々に狭まり30cm以下になり、道に備えられたロープを伝って沢に降り、対岸の崖に身を寄せながら登ります。こわごわ通過した家内は「自分の重いザックだったらもっと怖かった」と胸を撫でおろしました。二度目の渡渉も無事に終



2023.7.17 コトニへ下る尾根道 撮影：中村雅明

え、峠への道を登るとこ褒美が待っていました。峠に着き山道を海側に少し外すと涼しい風が吹き上げてくる展望台。日高耶馬溪の海岸線が見下ろせます。そこから少し下り、登山口から2時間半、11:38 原田宿跡に着きました。ここは旧淡路稲田藩士の原田安太郎夫妻が明治初期、12年間宮んだ旅籠屋の後に

す。林間の涼しい平場で気持ち良く昼食を摂りました。山道は小沢を何度も渡渉しては峠に登ってまた下りながら進みます。第2の難所のコマモナイの渡渉を難なく終えました。オナホイ、オイオイと言う面白い名前(アイヌ語の意味は聞き忘れました)の沢を越え、尾根を下った先のコトニの昆布干場に12:05到着。4時間45分、コースタイムよりかかりましたが、えりも岬に向かうバスの時刻14:06に余裕を持った下山で良かったです。

#### 【おわりに】

● 7月23日 田村裕之氏へ中村の「御礼」メール

田村 裕之様

様似山道のご案内有難うございました。(略)

コースは変化に富んで面白かったです。行く前のイメージでは山裾をジグザグに登り下りする単調な道イメージでしたが沢を登り、ロープを伝っての渡渉、気持ちの良い尾根道、尾根に出ると涼風、展望台からの海岸の景観：頂上を目指す登山とは違った楽しみがありました。(中略)

今回の山旅は前半のニセコアンヌプリ(14日)、後半のアポイ岳(16日)ともガスの中の展望なしの登山で残念でしたが、様似山道

で天候回復したのは幸いでした。様似山道を教えてもらった蛭川の良き追悼山行が出来ました。お世話になりました。

● 7月25日 田村裕之氏から中村への返信メール

中村さま

様似町の田村です。過日は、お疲れ様でした。

様似では暑い日の中、涼しげにいるお二人に衝撃を受けましたが、楽しんでいただけ良かったです。様似山道は、春か秋が涼しくて花や紅葉も良いです。

アポイも5月が花のピークです。ぜひ。また機会を見つけていらしてください。

この度は、ありがとうございます。

### 余市岳と樽前山

前神 直樹(1976年卒)

今年の北海道山行は本当に天気に恵まれなかった。最初のニセコアンヌプリこそは順調に登れたが、その後本命として狙っていた日高山脈のペテガリとカムイは天候が悪くて

登山口までしか到達できず、しからば十勝に転進してオプタテシケを登らんとするも、これも雨風強く途中で引き返すことになってしまった。些か意気消沈して札幌に戻ったのが7月18日。一緒だった佐藤さんは友人宅に行き、札幌在住の曲さんも帰宅してしまい、こちらは翌々日の帰京まで2日の時間が出来てしまった。さあどうしよう。

まさか2日も平地で過ごさわけにもいかず、札幌近郊の山を登ってお茶を濁すことにした。当初は増毛まで行って暑寒別を登ってみるかとも考えたが、そんな気軽なハイキング気分では登れそうな山でもなさそうで、札幌近郊の名にふさわしい余市岳と樽前山を登ってみることにした。

18日札幌は晴れ、実に4日振りに太陽の光を見たが、やはり夏は陽の光がなくちゃ、しかも東京の殺人的な暑さとは違う快適さでこれから帰京まではさすがに天気には少しは恵まれるだろうと思つた。この日の午後、時間もあるので、北海道大学の山岳館なるところを訪ねてみた。大学構内の正門から最も遠いところにあるのだが、大学構内中央の並木道がオリンピックのマラソンコースの一部になるくらい長く、その先の山岳館まで40分ほど

歩くことになった。さすが北海道大学、一橋の敷地の多分3、4倍くらいはありそうで、どの建物も非常にゆったりとしているように感じる。まさしく「兵どもが夢の跡」といった風情を醸し出している旧「恵迪寮」の対面に山岳館はあるのだが、この日誰も山岳館にはおらず中に入ることはできなかった。ただ部室とは別にこういう立派な建物を作った山岳部のエネルギーの強さに感心させられる。

翌19日、借り出したレンタカーを駆って高速道路を小樽方面に向かう。天気は曇り、太陽は姿を見せないが、日高、十勝の天気比べればずっとましだった。レンタカーの手続きで手間取ったこともあって、余市岳の登山口となるキロロリゾートに到着した時にはすでに10時を回っていた。最初このリゾート施設は冬だけの営業で、夏はほぼ人の居ない、かなり裏寂れたイメージを持っていたが、実際には広い駐車場に百台ほどの車が並び、登山口の脇にある、とガイドブックにあったマウンテンホテルはクラブメッドに名を変えて裏寂れたなどと言つては失礼になる立派な建物に生まれ変わっていた。

どこから山に入るのかと尋ねたところ、応えてくれたのは中華系シンガポール人かと思しき女の子で、登山が終わって水をくれない

かとお願ひした男性はセルビア人とか云つていたので、本当にこの辺りのリゾート施設はどどん海外系に移行していることを実感させられる。教えてもらった登山口で入林届けなるものを書き、ここから1時間以上も続く林道歩きが始まる。

時刻は10時半、当初想定した時刻より2時間近く遅れている。天気は変わらず曇りで、余市岳はすっぽりと雲の中に入っていて全容は全く見えない。林道入口には「クマに注意」の標識が生々しく書かれていて、姿、痕跡を見たら通報を、とあるが、生きていれば通報はするけど、と思つてしまう。一時間余りの林道歩きには人氣もなく、どこで熊が姿を現してもおかしくはないが、見た野生動物は鹿の親子連れだけだった。この林道歩きの中で、2、3分おきに笛を鳴らしていたが、もしかして背後に熊がいてもおかしくないとき々振り返りもしてみた。結局熊の痕跡も見ることなく林道歩きは七合目なる地点で終わり、沢を渡るといよいよ余市岳への登りとなる。当初なかなか高度が上がらずこのままじゃ山頂到着が夕方になってしまうと思ひ始めたらようやく傾斜が出てきて、順調に高度を稼いでゆくが、同時に周りにはガスも出てきて雲の中に入ってしまつたのが判る。そうこうする

うちに雨も降ってきて、本当にこの北海道山行は雨の祟りでもあるのかと思う。周りのガスも一向に晴れる気配もなく、汗もあつて全身が濡れそぼる頃、登山路は稜線と思しき所に出た。晴れていれば札幌方面が見えるはずだが、ただひたすら白いガスが立ち込め眺望など何も無い。ここから頂上まで約1時間、傾斜も緩くなった道を急ぐ。ガスの中にやけに立派な石塔が見えてきて、頂上かと思つたら石塔は1960年学芸大学とある遭難碑で、おそらく冬の雪にルートを失つた学生のものと思像した。

ここから頂上まで300mとの標識もあつて、平坦な草原状のところを進むと余市岳の標識が出てきた。山頂到着は14時過ぎ、林道終点から約2時間半の登りだった。山頂も変わらず厚いガスの中で、スマホで自撮りをするとそそくさと下山に掛かる。約2時間で林道に降り立ち、ここからまた1時間余り林道を下ってゆく。行きと同じく笛を吹きまくつて道を急ぐのだが、勿論熊の姿も痕跡も見ることとはなく、途中びくついて後ろを振り返つても熊が付いてくることはなかった。

駐車場に戻った時にはすでに17時を回っており、当初は下りたら小樽に出て美味い寿司でも食おうかと思つていたが、小樽もそん

なに近くないことが判り、今日はこの駐車場で車中泊だ、と決め込んだ。

持っていたガスバーナーで湯を沸かしていると、この辺りの警備員の人が近づいてきて、「敷地内では車中泊は禁止ですよ」と言う。仕方ないので、簡単な夕食を済ますとこのキロロリゾートの域外に出ればいいのだと解釈して、リゾートから2kmほど離れた、夏は使われていない施設のだだっ広い駐車場の片隅で車中泊とした。外も完全に暗くなって熟睡していると、車をノックする音で目覚めた。

「えっ、熊？ まさか熊がノックするはずもないか」と外を見ると、件の警備員が懐中電灯を持って立っている。曰く「その辺りはすべて車中泊禁止です、道の駅にでも行って下さい。二年前に熊の親子連れが出ましたのでよろしく」と。

こんな灯が全くない暗闇の中で車を走らせるのは嫌だったが、中途半端なところで寝ていけばまたしても追い立てられることは必定、止む無く幹線道路にて駐車スペースを探す。カーナビには道の駅も出て来ず車を走らせると、おそらく冬には雪上車を置いておくのだろう格好のスペースがあり、そこで車中泊とした。

翌20日、朝4時頃明るくなった道を今度は

支笏湖に向けて走る。途中「道の駅あかいがわ」なるところに出てきて、最初からここに道の駅があることが判つていけば、警備員に注意を受けることもなかったのにと思うが後の祭り。

こちらベンチでお茶を沸かして朝飯を食べていると、あちこちの車からタオルや歯ブラシを持った人が出て来るので、ここはその道の人には有名なところなのだろう、熊本ナンバーの大きなキャンピングカーも停まっている。

車は羊蹄山の北側を通ってゆくのだが、羊蹄山の頂上はついに雲の中から姿を現すことはなく、本当に今回は天気的神から見放されたようである。約3時間のドライブで樽前山7合目登山口に到着。余市岳では登山者には一人しか会わなかったが、ここにはハイカーと思しき人が何人もいて、おそらくは東京の高尾山のようなところなのかと思つたりもする。

登山口を7時50分出発、天気は曇り、ただこの日、太陽は出なくても雨は降らないと思われる。樹林帯を30分も行くといきなり火山礫岩の道に変わり、風景は浅間山登山路にそっくり。ガスの中なのではっきりとはしなかつたが、頂上も近い様子。風が強くおかげ

で汗もかかず、登山口からわずか1時間足らずで樽前山の東山なるピークに着いてしまった。

本当の頂上は火口壁の真ん中にそびえるドーム状の地点らしいが道はない。ガスの中でぼんやり浮かぶドームの写真を撮ると、寒いところに長居は無用とばかり下山した。登山口まで下り40分、9時40分には登山口に戻る、あつという間の登山だった。

この山行では難関のペテガリ、カムイには登れず、他に北海道には登ろうと思っている山がまだ10以上残っている。すべて登るためには多分後3年はかかりそうな感じだが、その時には天気の神様が微笑んでくれることを切に祈った。

## 山と私 2

石原 脩 (1955年卒)

沢登りに夢中だった頃

―山は探検の遊び場だった―

私が父離れた最初の山行は、戦前から奥多摩最高のヴァリエーション・ルートと言われていた海沢を遡行し大岳山にいたるものだった。単独行だったが、滑滝が多く巻き道も明確で容易だった。印象に残ったのは、沢筋の下半分を占める木材搬出用の木道だった。その後遡行した川乗山への入川谷では、最初の核心部のゴルジュを足下に見ながら、木道で越えてしまった。日本の林業もまだ盛んだっただ。

15歳の少年の興味を引いたのは、次から次へと垂直の滝を連ねる丹沢の沢だった。

最初の丹沢は、順層で登りやすい小滝を連続させる葛葉川本谷を選んだ。翌月は新茅ノ沢、次は四十八瀬川勘七ノ沢と止まらなくなり、表丹沢の沢は登りつくして、丹沢山へのキウハ沢・西丹沢の同角沢と足を伸ばしたと

ところで、大学受験期に入ってしまった。学校の山岳部は戦後2年目の昭和21年、私が中学2年生の時に「健脚班」という名称で始まった。部長は山本先生だった。このスキンヘッドでお説教の長い数学の先生と沢登りの話は不可能なので、個人山行にして数人の仲間と登った。この頃の私の山は、「冒険・探検」の山登りで、庭石を見れば表面に岩登りのルートを探し、山に対すると沢ばかりが気になった。

高校2年の9月に健康診断で肺門リンパ腺炎との診断を受けた。6ヶ月間の静養期間を経て、また登りだしたが、一橋山岳部に入れたのはこの病気のお陰だと思っている。

一橋の仲間との付き合いは長かったが、中学からの仲間とは、山行記録に残る7人の内6人が若くしてこの世を去った。なかでも昭和30年5月に一の倉本谷で逝った千田君のことは終生忘れることはなかった。昭和27年6月一年浪人した彼は東経大の山岳部一年だったが、越沢バットレスに私と二人で出かけた。通常は第二テラスからは踏跡を辿って左に回るのだが岩壁の頂上に向かって直上した。10米で極端に岩が脆くなり、左手で掴んだ百科事典型の岩がスッポリ抜け、後転しながら落ちた。千田君の話によると、一本の細

い木が支点になって私の体は第二テラスに軟着陸したが、衝撃で千田君の体は浮き上がったそうだ。

3年後、彼はザイルを結んだまま一の倉本谷のシュルンドで発見されたが、状況から見て、この時もセカンドだったので、落ちてくるトップの姿に私を見たに違いないの思いが脳裏から去らないのだ。

その翌年の冬、阿中君が千代田火災の仲間と苗場山頂で凍死した。俳句をおしえてくれた波多野も50代でこの世を去った。中・高校のOB会に出席する度に、野球部の喧騒がうらやましく思える昨今だ。

### 一橋大山岳部の頃

―スポーツ・アルバムと何だったのか―  
中学生の頃から、俳句・スケッチ・写真入りで山日記を大学ノート5冊に記してきたが、大学2年の時にほぼ100日間山の中にいたので、書く暇がなくなった。しかし、幸いにも3・4年の克明な記録や雑文が「針葉樹11号」に収録されたので、生涯山行記録をまとめる事が出来た。なかでも、礫な山には登れなかったが、大学1年の時のドタバタ日記が最も印象深い。

昭和26年(1951年)に入学すると、早

速山岳部に入った。部室は横山・鹿保両氏が住宅難の折から暮らしていたので所帯ずれしていたが、キャンパスのなかのオアシスであった。目の前の松ノ木からのアプザイレンは楽しく、そして、隣の官舎に住む太田哲学教授兼山岳部長の3人の娘さん達は美人ぞろいだった。同期の須山・白川・奥野はいずれも山岳部経験があり気楽に山に誘えた。新入部員5人中4人が経験者の年度は一橋山岳部の歴史上でも皆無のようだし、唯一未経験の勝田は後年の法学部長たる素質を彷彿させる弁舌と、古い学生帽のお陰でとても1年生には見えなかった。5人は無心に遊んでいたのだが、どうやら下克上の風を吹かせたようで、何人かいたはずの2年生が消えてしまった。29年卒業生が針葉樹会の名簿上空欄なのはこのためだ。

夏合宿は剣沢生活から、針の木峠越えて大町に下山した。参加者は新人4人を含め10人で、翌年から部員数が急増するとは夢にも思わなかった。

米は配給制度下だったし、馬鈴薯なども買出しを要した時代なので、現地調達した物を称名の滝下にデポし、弘法小屋で一泊した後、漸く剣沢に着いたが、翌日、須山・奥野・石原の新人3人はデポした食料の荷揚げを命じ

られた。この往復は大学山岳部生活のなかでも最も厳しい一日になったので、軍隊帰りの小泉キャプテンの新兵いじめを多いに恨んだ。しかし、須山・石原コンビは何をやらせでも強く、日記によると、朝飯当番にしたら先輩組よりも一時間早く作ったとあるし、富山高校出身の奥野は「剣・立山のことは俺に任せろ」と、全く憚るところを知らなかったので、3人の荷揚げ行は当然の成り行きだったとも思われる。

平蔵・長次郎雪溪の登降も楽しかったが、源次郎尾根にいても、気になるのは八つ峰から聞こえてくる他校のコール・サインだった。夏合宿直前に三つ峠で岩登り合宿をやった須山・白川・石原の新人3人が「あそこへ行きましょう」と提案したが、M先輩の「あそこは馬鹿の行くところだ」の一言で実現しなかった。岩登りはやらない山岳部だったのだ。立山・五色が原・平の小屋と歩くうちに3、4人の靴底がパツクリと開いた。鋏を打っただけの軍靴は雪溪には弱かったのだ。

岩登りをやる人が一人いた。その横山さんに3年のTさんと新人の私が、三つ峠で特訓を受けた。Tさんは初日の地蔵ルートで「もうだめだ(死ぬ)」を連発した後、三つ峠から

も山岳部からも別れを告げた。翌日から中央カンを除き全てトップで登らせてもらった。秋の爽やかな2泊3日だった。

12月に入って、戦後初のポーラー・システム？による冬山合宿が遠見尾根經由五竜岳に向けて行なわれた。

遠見小屋にアタックパーティーの最上級生、小泉・横山さんと新人3人を残して、3・4年の5人が大遠見山の先まで前進テントを張りに行ったが、翌朝、全員がボロボロになって戻ってきた。テントを燃やしたとのことだ。原因はラジウスの圧力調節弁が無くなったので、代わりに木の枝を差し込んでおいたら爆発したそうだ。さすがは一橋大生だ。

またもや須山・石原コンビの出番となり、命じられるままに餅を15個持ってアタックパーティーに従った。穴の空いたテントを縫い、アルコールバーナーで晩飯を作るところまでは良かったが、先発隊が食料まで持って降りたらしく翌日の食べ物がない。「餅を15個ずつ持てと言ったんだ。だから60個だったんだ」と叱られた。やむなく、テントキーパーの新人二人は翌朝から絶食した。白川が一人で遊びに来たが、その弁当が貴重だった。なぜなら、登頂後テントを通過したアタックパーティーから、二人に撤収が命じられたから

だ。

日記に、「遠見小屋の前まで来て振り返ったら、凍ったテントが斜めになって、須山がYの字になって降りてきた」とあった。

翌27年は戦後急拡大の初年度で、後年、山仲間で有名になった甘利のほかは佐藤・鈴木以外に経験者は少なかったが、十数人がどつと入部し岩登りにもセンスをみせた吉田・松尾達がいいた。

上級生は3年生が居らず、時は朝鮮戦争後の不況期の最中、戦後初の新制4年生と旧制最後の本科3年生の2学年が同時卒業のため、まことに厳しい就職活動の年であった。

この為に、秋からの部室は1・2年生ばかりになった。

こんな状況下の山岳部には、今考えても三つの課題があった。

まずは、26人という記録的な人数の27年夏合宿を前にしてテントがない。望月・大塚さんの音頭で多くの先輩が面倒を見てくれたが、寄付集めの会社訪問が山よりも大変だった。しかし、冬の装備までは手が届かず、次の28年度の寄付集めで冬の装備が整い、29年度から現在の会費制度にもらった。「最前戦後ではない」と昭和29年の経済白書に謳

われる以前の低賃金下、後輩を可愛がってくれた当時の先輩方には今も感謝している。

2番目は、無雪期の岩登りだったが、縦走組を送り出してからの27年奥又白合宿以降、夏の岩登り合宿が定着してザイルのトップ層が充実していった。この27年の時には、甘利と四峰の明大ルート・甲南ルートを私がトップで登った。しかし、甘利が甲南のハングを、私が苦勞して掛けたアブミを使わずにバランスで上がってくるのを見て以来、彼は名実共に一橋山岳部の登攀隊長になった。

3番目は、痛恨の雪山合宿だ。27年度の冬と春には戦前からの装備しかない上に、前年の遠見合宿のメンバーは困難な就職の關係で参加が皆無だったので、2年生の私がチーフになった。12月は乗鞍でスキー合宿をしたが、3月の岳沢生活は私と須山・勝田そして1年生の甘利の4人だけが参加した。冬のウインパーティーが一張りしかなかったとの表面上の理由だったが、多くの新人を冬山に連れて行く自信が私にはなかったのだ。

果たせるかな勝田が底雪崩で落ちたし、戦前からの古いラジウスは鼻づまりで点火せず、空きカンで灯油を燃やし、鼻の穴まで真っ黒になってなんとか前穂高とジャンダルムに

登って生きて帰ってきた。部全体での雪山がスタートしたのは、翌年の同じ岳沢合宿からだった。

今にして思えば、私の大学山岳部後半の山登りは、拡大する部員への対応と新人教育、そして合宿の日程消化に終始した。自分の好きな山に行けたという点では旧制の大学6年間時代がうらやましい。また、街の山岳会が冬季初登攀を競い、さらにスーパードルビニズムと称して、壁の連続登攀までやる中で、大学山岳部は人数のみ肥大化し、スポーツ・アルピニズムの名の下に組織的な登山を繰り返していた。私の唯一の自慢は20年間遭難死をださなかった部の歴史の一翼を担ったことだ。

私が楽しんだ山行は、幾つかの合宿下見行だったが、28年12月、梅池スキー合宿が終わってから白馬を往復した後、新人の時に辛い思いをした遠見尾根に移って五竜岳を稼いだ一人旅が忘れられない。そして、Y中と雪洞を掘りに行ったが、これらは29年3月の二度目の岳沢合宿を前にした自分自身への特訓でもあった。

「針葉樹11号」に記載された3・4年生の山行を経た後、30年3月に白川と横尾岩小屋

の春合宿のベースキャンプまで行ったのが、現役最後の山行になった。

(2008年10月 記)

### 若い社会人の山

#### ―遠ざかる山に憧れた頃―

28歳で結婚するまで、山は富士電機本社での社会生活の中で主要な役割を果たしていた。た。

まずは採用担当のK係長に睨まれた。前年の後立山冬合宿での右顔面の凍傷痕が、4月になっても黒く残っていたので、入社式時からジロジロ見られたうえ、5月には東経大キャプテンになっていた千田君の一の倉本谷での遭難で、ご家族を現地まで案内するため休暇をとったが、K係長から「実習生の分際で休みたいとは何事か」と叱られた。

その年の暮、新人には勉強になるからと、会社の業務案内の古河系関係会社紹介を作られた。11社中10社はメーカーなので主要製品の写真を掲載したが、ポリドールだけは当時一世を風靡していた「コーヒー・ルンバ」の西田佐知子のブロマイドを所載したら、勤労部長に呼ばれ「教育資料に女の写真正とは不謹慎である」といわれた。1945年以来の女性参政権をなんと心得るかというわけにもいかず、「これは女ではありません。ポリドール

ルの主力商品です」と頑張り通した。

人事勤労筋から信頼されるようになったのも、やはり山のお陰だった。

当時の経済再建の前提として「電源開発」があり、会社は急拡大中で、入社した頃の本社は400人足らずだったが、その三分の二が独身者だった。就業後の娯楽といえば、まだテレビも普及していないので、男はパチンコか飲み屋、女はお稽古事で、娯楽が乏しい時代だった。この中で私が主宰するハイキングクラブが打ち出す行事には多くの若者が参加してきた。普通の山行で20人、富士山だと30人、冬のスキー・バスは2台満席の100人にもなったので、労務行政上有益であると総務・勤労部から援助金が出た。

仕事が調査課から秘書課そして監査から企画部へと本社の中核部に移るにつれ、周囲には理屈ばかりの人間が多くなったが、そんな中で山屋としての即戦力が買われたのだろうか、「労働争議だ」「総会屋だ」「下請けが倒産した」などの話がでると、いつの間にか、担当でもないのにお呼びが掛かった。体育会系即戦力の評価は一生ついて回ったようだ。

山岳部OBとしての登攀は昭和32年秋の一の倉・烏帽子の奥壁が面白かった。軽い日

帰り山行の予定だったのだが、南稜テラスで雲表クラブの松本氏に出会いその初登攀ルートを克明に聞いた甘利は取り付き点に向かって走り出した。私も山本も引きずられて登ったが、時間が遅かったので草付きピークの上で真つ暗になった。そこからは、懐中電灯もビバーク用具もないので、私の手探りで踏み跡をたどりなんとか尾根道にでた。肩の小屋は翌朝、新雪に覆われていた。

その翌年の年末、徳沢に10人程集まり奥又白の冬季登攀を目指したのが最大のOB山行だったが、先発した4人がDフェース下から流され、甘利ともう一人は上で止まり、下まで流された佐藤とT中は徳沢に救援を求めて下りてきた。私らは夜道を駆け上がり夜明けには奥又の池に達したが、デブリの上で甘利に招集された人たちが行方不明の二人を捜索中だった。吹雪の中で上下に分かれた四人は、夫々が遭難したと思い込んだのだった。甘利とT中が「バカヤロー、バカヤロー」と嬉しそうに怒鳴りあう声が奥又白の谷にこだました。

ところが霧と小雪のなかから、4峰の甲南ルートに登攀中の声と音が聞こえてきた。この冬季唯一未登の部分は、この時に私と山本がトライすることになっていたので、目の

前でやられてしまったのだ。仮に、一両日早めに私らが登つたにしても、衝立岩から四峰の甲南ルートそして前穂のフェースを連続登攀して、当時の山屋を仰天させた雲表の連続登攀の陰に霞んでしまったことだろう。

偶然だが、翌34年の10月に雲表・松本氏の一行と一の倉二郎君で一緒になった。私はハイキング・クラブのY君と早めに肩の小屋に入ったが、女性を含む大人数の雲表パーティは、初雪の中、瀧澤上部のハング下でビバークしたそうだ。

会社のハイキングクラブの中からも、五月のコブ尾根や三月の八ヶ岳に同行できる仲間が育ち、若い独身の山屋にとっては山の恩恵を受けて楽しい六年間の社会生活だった。

この時期の山は、殆どが13歳から登つたことのある山々のリフレインだったので、よく言えば円熟期の登山といえるかも知れない。新しく加わったのは、「先達」として、宗教心はないのだが富士山を中心に、人を案内する楽しさと難しさを知ったことだ。「海外遠征」の話もあったが、仕事上のタイミングも悪く、尊敬する上司に夜中まで「行くな」と説得されアンデスにも行きそびれた。

## 空白の時代

15年間だが、感覚的には随分長かった。結婚して子どもが二人、会社では管理職になって、每晚8時まで机にしがみ付いている時期は、山屋にとっては空白の時代だ。

しかし、松本工場に出張する時は必ず窓際の席に座り山を見た。そして、頂稜に白い雪を見ると、手と足の皮膚が静電気に触れたように痺れるのを感じた。頭では忘れたつもりだが体は覚えていたのだ。

新しいパートナーの女房とは、一度天神平から谷川岳に登ったが、沢登りにでも連れて行くとういう気にはならなかった。新田次郎の小説でも、ベテランの山屋同士が結婚した途端に、岩場でお互いが気を使わずぎるようになって、ドリユの西壁で遭難死する描写が、あったが、危険なところへ二人で行く気にはならなかったのは事実だ。

二人の息子については、もっと極端な現象が出た。父が私を連れて行った程度の山やスキーには連れて行ったが、山岳部には入らないようにと願った。幸いにも長男はサッカー部副主将、次男は剣道三段になったので安心した。エゴな話かもしれないが、山の恐ろしさを知りすぎたのだ。

出張の途中で立ち寄った山行では、2月にグリンデルワルドで二泊三日滞在し、フィル

ストの頂上から高さ1000メートルを滑り降りたのが最高だった。しかし、吹雪の中、人影もなく、オレンジ色のガイドポールだけを頼りに降りている最中に、弱気になった私の脳裏を横切ったのは、世話になっている会社の上司の顔だった。翌朝、晴れた空から、浮世のしがらみに巻かれた元山男を、ヴェッターホルンが見送ってくれた。

この間の山との付き合いは、皆勤賞の山岳部OB会だけになっていたが、昭和23年以来20年間なかつた遭難死が頻発した。中川孫一先輩の初めてのOB遭難にも心が傷んだ。

(次号へ続く)

## ■図書幹事より「報告とお願い」

中村 雅明(1968年卒)

昨年(2022年)は図書(データ保管)にとつて節目の年、懸案事項が片づきました。それらのご報告とお願いを以下に記します。以下、「二橋山岳会ホームページ」を「HP」と称します。

### 1. 『針葉樹』& 『針葉樹会報』のデジタル化

創部100周年記念事業の一つとして、『針葉樹』1〜14号(15号はデジタル版あり)、『針葉樹会報』1〜110号(111号以降はデジタル版をHPに掲載済)のデジタル版を作成し、HPに2022年3月末に掲載完了しました。また、作業途中に100周年記念写真誌作成メンバーから強く要望された『戦前』針葉樹会報』1〜99号+特別号の計100冊のデジタル版作成を追加作業として実施し、HPに2022年5月末に掲載完了しました。作業としては①デジタル版作成用の原本集め②原本を頁単位に断裁し、それをスキャンしてPDF版を作成&検証③PDF版のHPへの登録と一般公開を行いました。

#### ①原本集め

本作業に先立って故蛭川隆夫氏から生前、2018年11月に蔵書の寄贈をいただきました。その中に針葉樹会報第8〜88号の内69冊が含まれていました。それらと部室に保管されていた残部をベースにしました。

なお、必要部数は前述冊数に後述2・合本(101〜150号)各3部も加えた冊数の取り揃えを開始しました。開始早々に創部100周年記念事業準備委員の兵藤元史会員から『針葉樹復刻版』(1〜13号全巻)、針葉樹会

報49号〜122号の内38冊寄贈いただき大変助かりました。『針葉樹』は兵藤会員からの13冊に部室に保管されている14号を加えて全巻揃いました。必要部数に満たない会報は創部100周年記念事業準備委員と図書幹事の連名の「針葉樹会報寄贈のお願い」(注1)メールをHUAACメールにて会員宛てに発信しました(2021年9月13日)。

不足冊数はデジタル化用の13冊、合本の12号分24冊でしたが、小野肇会員より直ちに22冊寄贈いただき弾みが付きました。さらに岡田健志会員が9冊、兵藤会員が2冊、小島和人会員が1冊寄贈され、残りが3号1冊となりました。会員に再度寄贈をお願いしましたが、入手できなかつたので部室に保管されている合本よりヤマト印刷殿にコピーしていただく事にしました。会員の皆様のご協力を感謝します(注2)。

(注1) お願い文は本記事のHPの『アーカイブス』―『記録・資料』参照

(注2) 会員からの会報寄贈、PDF版の原本として使用の明細資料は『アーカイブス』―『記録・資料』参照

#### ②原本を断裁し、それをスキャンしてPDF版作成&検証

当初、本作業用に断裁機と高性能スキャナーを購入し、学生十図書幹事のボランティア

ア作業を考えましたが、作業量、品質上の懸念（経年劣化による黄ばみ）から会報の印刷を委託しているヤマノ印刷殿の見積りが妥当であったので委託する事にしました。

発注は2022年1月21日の針葉樹会臨時総会の決議を待って加藤博行総務幹事より行い、スキヤニング作業が開始されました。

発注金額は256,960円です。作業は順調に進み3月19日に全てのPDF版が納品されました。検収は図書幹事の中村が行いましたが、品質は全く問題ありませんでした。

### ③PDF版のHPへの登録と一般公開

HP技術担当の山崎孝寿特別会員により全PDF版がHPの『アーカイブス』—『針葉樹』及び『針葉樹会報』に登録されました。

入手したい号の表紙写真をクリックするとPDF版を画面表示／ダウンロードすることができます。多数のPDF版にも関わらず極めて迅速に作業していただきました。図書幹事の中村の検証後、3月29日に加藤HP幹事より一般公開されました。12月末に故柿原謙一（昭和12年卒）先輩のご子息から会報のバックナンバー26冊の入手希望が加藤総務幹事に寄せられました。手元欠号と謙一氏と山行を共にし、ご子息もご存知の方々の追悼号、中村保会員が寄稿されている諸号です。印刷物が必要か、HPよりのPDF版ダウンロード

ドで可か確認したところ、「必要な会報の記事はデジタル版からダウンロードできて用が足りた、デジタル版の方がそのまま編集して使えるので良かった」との連絡が加藤会員にありました。外部の方にも早速、役立ちました。

### 2. 『戦前針葉樹会報』のデジタル化

作業内容等はHPの『アーカイブス』—『戦前』針葉樹会報』の前書きの「戦前会報のPDF版のこと」に纏めていますので以下に転載します。

#### ■（戦前会報のPDF版のこと）

中村 雅明（昭和43年卒）

1. 本HPに登録したPDF版は一橋山岳部創部100周年記念事業の一つとして実施された針葉樹第1〜14号、針葉樹会報第1〜110号のPDF版作成の続編として企画・作成されました。また、それを登録する受け皿として当HPの『アーカイブス』にこの頁が新設されました。

2. PDF版作成に使用した戦前会報は、単本が16冊しか保管されていなかったため山岳部室に保管されていた合本3冊を解体断裁し、単本としたものと16冊の単本から状態の一番良いものをPDF原本としました。選定したものは『戦前針葉樹会報一覽』で黄色付けしたものです。

なお、第93号は欠番なので、日本山岳会の図書室に保管されている望月先輩寄贈の合本からコピーを頂き1〜99号十特別号の全巻揃いました。

3. 合本の解体断裁は「文具しまだ」に、原本をスキヤンしPDFを作成するのは「ヤマノ印刷」に委託しました。

4. 当HPへの掲載は会報を謄写版刷の1〜44号、活版刷の45〜99号に纏めました。再製本もその2分冊です。なお、原本のA5版からB5版に拡大印刷しました。

5. 原本の通巻、第〇年〇号の印刷ミスは訂正しました。『戦前針葉樹会報』の赤色付け欄の数字が正、原本の誤りは右欄外に示しました。

#### 【補足】

①「文具しまだ」に支払った合本解体断裁費は11,000円、製本代は12,650円

4月19日 断裁会報受領

6月23日 合本製本仕上り

②「ヤマノ印刷」に支払ったスキヤニング費は131,024円です。

5月11日 スキヤニング完了

③「戦前針葉樹会報一覽」はHPの当該記事から入手できます。

（2.と5.の明細資料）

④ 戦前会報の一般公開の直ぐ後に100周

年記念写真誌の編集委員兵藤会員から、「写真誌のキャプション用に戦前の会報に当たっています。：デジタル化本当。に役に立っています。改めてお礼申し上げます」のメールをいただきました。

### 3. 『針葉樹会報』の合本(101〜150号)作成

2022年5月23日付けで会報第150号が発行され101〜150号まで50冊揃いましたので合本を作成しました。前回の会報合本は100号が発行されたのを契機に当時の会報幹事の井草会員主導で実施されました(注3)。

今回は2分冊(101〜125号、126〜150号)を3セット(国立部室、日本山岳会、芦安山岳館)作成しました。合本製本は現在部誌の製本を委託している国立駅近くの「文具しまだ」に委託しました。今回、同社に『針葉樹會報』の解体・製本も委託しました(前述)。前述した通り各号3冊ずつ取り揃えたもので5月23日に発注、6月2日に仕上がりました。厚さ6cmの立派な装丁です。製本代は40,150円です。

6月17日に日本山岳会図書室に2分冊を持参し献本しました。立派なものをと喜んで

いただきました。後日、同会図書委員会の委員長名義のお礼状が届きました。6月20日の三月会で国立部室保管用の合本をお披露目し、学生に持ち帰ってもらい部室本棚に格納済です。

芦安山岳館へは2分冊を7月14日に郵送し、10月2日に山岳館を訪問して針葉樹文庫の棚卸、合本2分冊を文庫本棚に格納しました。本箱スペースに空きがなく合本格納の爲に3冊外置きにいただきました。今後の事も考えてさらに何冊か選定して外置きする必要があります。

(注3) HPの『アーカイブス』―『文庫・蔵書・著作』―『文庫』に掲載されている「針葉樹文庫解題 捕逸(如水会館にあった『針葉樹会報』合本について)」で故蛭川氏が合本の作成経緯と当初如水会館に寄贈された合本が芦安山岳館の針葉樹文庫に組み込まれた経緯を述べています。

### 4. お願い

創部100周年を迎えたのを契機に『針葉樹』15号に掲載されている「一橋山岳部&針葉樹会年表」、「文献集」、「一橋山岳部在籍者名簿」の2012年〜現在までの更新版を第15号の末尾に登録しました。第15号の【編

集後記】に「図書幹事の責務として最新版をホームページに掲載します」とお約束しながら10年間怠ったことお詫びします。今回年表に追加した10年で記載すべき事項・出来事で漏れているもの。誤りがあれば、ご指摘下さい。また、在籍者名簿で在籍者の漏れ、在籍状況の誤りがありましたら、ご指摘下さい。なお、在籍者名簿の更新担当を今年度より図書幹事から学生幹事に移管しました。

(2023. 1. 31記)

### 書評

佐藤 周一(1979年卒)

『ぐうたら神父の山日誌』

(伊藤淳・女子パウロ会刊)

### 【著者について】

昭和58年に一橋大学社会学部(阿部謹也ゼミ)を卒業した伊藤淳氏は、Y M C A 一橋寮の後輩です。私が卒業した後に入寮した彼とは直接の接点はありませんが、3年ほど「味の素」で勤務した後、私立ミツシヨン系高校で社会科教師として10年余り教鞭を取り、そ

こから神学校に入り直して40歳過ぎにカンリックの神父となった人物。現在は東京教区司祭として松戸教会で主任司祭を務める傍ら、高齢者信徒等の「看取り」を積極的に行う神父として暫く前にNHK特集で取り上げられてもいます。

令和5年6月に上梓された掲題書は、栄光学園中学時代から登山を始めた伊藤氏が神父になってからも続けている国内外の山旅をエッセイとして綴ったもので、登山が好きだったことは今回初めて知りました。聖書によれば「山は神と出会う場所」とされており、彼の紆余曲折の多い半生の中で、山に登りながら重ねた神との対話も含め、さまざまな思索の経緯が窺える「心の旅路」を記したものとなっています。

### 【紹介されている山旅】

鎌倉市に所在しイエズス会が設立した栄光学園（中高一貫校）は丹沢が近いことから、中学生の時に丹沢詣でを始めます。高校に進むと「むじな山岳会」というサークルを立ち上げたほか、個人山行で奥秩父や上越国境、南アルプスや北アルプスへとフィールドを広げていきますが、高3になると受験勉強に専念するため、登山は一時休止します。

一橋に入学後、なぜ山岳部を選択しなかったのかは本著で明らかにされていないので、本人にメールで確認したところ、入学直後に体調を崩してしまい体育会系のサークルは無理だと感じたからとの由。入部していれば、ホワイテイル三君の一期下になるので、どのような影響を与え合っただかなあと考えてしまいます。

丹沢以外に本書で紹介されている山旅は、富士山、槍ヶ岳、奥多摩御岳山、入笠山、鬼怒沼山、吾妻山と続きます。鬼怒沼山は阿部謹也ゼミの旅行で幹事を引き受けた著者が奥鬼怒温泉郷に泊まりながらゼミテンと登ったもの。阿部ゼミに入った動機は、大学入学直後に洗礼を受けた著者が「キリスト教に関係が深い西洋中世史を学びたい」と考えたからだそうです。この旅行中、阿部先生と温泉に浸かりながらキリスト教談義をする箇所が出てきます。先生は中学の時に洗礼を受けたものの、ほどなくキリスト教に疑問を感じ、信者籍を返上することを東京教区の大司祭に相談すると「慌てて棄教することはないから、ゆっくり考えて結論を出しなさい」と諭され、そのままになっているとの話を伊藤君は聞かれます。

卒業後、10数年後のゼミOB会で先生に再

会した折り、著者が神学校に進み聖職を目指している話をしたら「僕の葬式では伊藤君に司式して欲しい」と言われたそうですが、先生が程なく人工透析中に急死されたため、その希望は残念ながら叶わなかったそうです。

国内の山旅以外では、一橋卒業直前の旅行で欧州をバックパッカーとして巡る中、マッターホルンの麓で山スキーを楽しんだり、最初の勤務先を退職後の休暇中、アイルランドのキリスト教聖地であるクロー・パトリック山（764<sup>㊦</sup>）まで足を延ばしたりしています。

神父となって以降も、聖地巡礼としての山旅が続きます。イスラエルのゴルゴダの丘（777<sup>㊦</sup>）やオリーブ山（808<sup>㊦</sup>）など、キリストの足跡が残る「定番」聖地は勿論のこと、中国雲南省の蒼山（ツアンシヤン…雲嶺横断山脈の南端峰）の麓にある天主教堂を訪ねたり、ネパールのポカラで教会併設の教育・福祉施設を運営するイエズス会所属の日本人神父を訪ねていくなど、多忙な日常業務の合間を縫って精力的な山旅トレッキングが続きます。

興味深いのは旧約聖書の聖地でもあるシナイ山（2285<sup>㊦</sup>）登頂。モーゼが神から十戒を授かったとされる「神の住まい」巡礼ツ

## 会務報告

### 2023年(2022年度)

#### 針葉樹会総会報告

2023年8月7日(文責 加藤)

以下の通り開催されました。

日時；2023年7月21日(金)

18:30～20:30

場所；如水会館14階「一葉・梧桐」

#### I. 総会の成立

総会員数；特別会員3名、普通会員136名

委任状提出会員39名、出席会員15名

合計54名の総会出席者数となり、会員136名の3分の1以上(46名以上)の規定を充たし、総会が成立しました。

#### II. 出席者及びオンライン参加者

会場出席会員(15名)・・

本間、小島、佐藤(久)、岡田、中村(雅)、井草、前神、兵藤、加藤、佐藤(周)、中西、稲毛、白石、川名、内山

出席学生(8名)・・

浅香、関(3年)、吉田、大枝、三宅、佐野、石井、宮田(以上1年)

オンライン参加会員(3名)・・  
竹中、糟谷、山下

#### III. 総会議事

加藤総務幹事の司会のもと、前神会長が議長席につき、総会を開始しました。

#### 報告事項

##### 1. 2022年度活動報告

加藤総務幹事より、2022年度の活動につき一括して報告がありました。(報告内容要約)

##### 1) 会合

① 幹事会(2022年6月20日)

② 定期総会(2022年7月22日)

③ 新年会(2023年1月18日)

④ 卒業生をお祝いする会(2022年3月20日 卒業生5名出席)

⑤ 三月会(2022年6/20、9/12、10

/17、11/21、12/21、2023年3

/20、4/17、5/15) 8回

##### 2) 学生支援

・ 学生幹事会の実施

2022年 6/15、10/12、12/12、  
2023年 2/8、4/12 合計5回

今期はすべて対面集会ができた。

・ OB/学生共同山行

2022年6/3-4 針ノ木雪渓での

アーは、山頂でのご来光を目指す「富士山ツアー」に類似しており、登山口の宿を夜中の2時に出発し、ヘッドランプの明かりを頼りに、ラクダも通れるほど整地された登山道を行列となって登頂。日が昇ると、登山者(信者)たちが一斉に聖歌や讃美歌を歌い出す光景は富士山とは違うようですが・・・

学生時代に洗礼を受けたものの、神父になるまでの間の紆余曲折を「ぐうたら」と評することは少々自虐的であり、迷いつつも聖職にある身として弱者にひたすら寄り添う現在の姿は、本当にぐうたらな私からすれば素晴らしい半生だと感じます。YMCA一橋寮の卒業生で神父や牧師になっている者は二桁に達しますが、登山を愛しながら、ここまで正直に心の遍歴を語っている聖職者は少ないと思います。ご興味ある方は是非、一読してみてください。

(2023年7月)

雪上訓練にOB5名が参加。

9/25 軍刀利沢 半澤 浅香、小松、  
亀井、古田(OB)

11/5 越沢バットレス 半澤、小松、  
関、下西ノ園、吉川、佐々木、前神(OB)、  
兵藤(OB)

2023年3/15 上州武尊岳 浅香、  
関、小西(顧問)、前神(OB)、兵藤(OB)

### 3) 針葉樹会会報発行

第151号(2022年11月)、  
第152号(2023年5月)

### 4) 懇親山行

① 2022年6月6日3~5日 針ノ木岳

(参加者会員6名、学生15名)

② 100周年記念北岳及び周辺山城 9月  
29日~10月2日に分散して実施

(会員15名、学生10名、計25名参加)  
会報152号に詳細報告

③ 2022年12月4日 富士山ビュー山  
行(百蔵山)(会員他9名、学生3名参加)  
同じく会報152号に報告

なお2023年5月中旬予定の「新緑と  
残雪山行 谷川岳周辺」は実施せず

### 5) ホームページ関係

① ホームページの内容工夫により、会員(特  
に若手OB)のアクセスを高めることを

目指したが、若手の具体的なニーズ・要  
望を把握する機会を作れなかった。

・ ホームページ更新お知らせメールは5割  
増  
2022年6月~2023年5月 計  
12回(2021年度年8回)

・ ホームページアクセス数は、ほぼ横ばい

② ホームページの総務関係情報整理  
・ 針葉樹会員名簿/登録メルアド更新  
名簿定期便の発行(関係幹事に月一回)

### 6) 図書関係

① 部誌の補修(解体製本)

1959年度、1962年度

② 針葉樹会報合本

2分冊(101~125号、126~1  
50号)を国立部屋、日本山岳会、芦安  
山岳館に格納・献本

③ 「一橋山岳部&針葉樹会年表」、「同左 文  
献集」、「一橋山岳部在籍者名簿」の改訂  
改定版をIPに登録。一橋山岳部在籍者名  
簿」は学生幹事に移管

④ 針葉樹会報の残部整理(保管部数の設定)

⑤ 針葉樹文庫の棚卸 合本の格納に伴い、  
図書の一部を入れ換え

### 7) 創部90周年記念事業(継続事業)

4年ぶりに再開の機会を迎え、6月初旬  
を予定したが、荒天の為9月末に延期と

なった。

### 8) 創部100周年記念事業

① 百周年記念写真誌の作成

2022年12月21日 百周年記念誌発  
刊(300部)

以降、会員、協力者、他大学その他への  
送付作業を行い、学生部員、大学、如水  
会等にも手渡し追加要望にも対応した結  
果、2023年5月末現在の残部数は32  
冊

### ② 北岳集中登山(懇親山行②)に掲載

2022年9月29日~10月2日

参加者:OB15名(顧問を含む)学生(院  
生を含む)10名合計25名

天候にも恵まれ、大きな事故もなく無事  
終了

### ③ 拡大月見の宴

井草OBの厚意で鳩ノ巣、鳩里庵にて開  
催、OB学生と総勢30余名ほどが参加し  
て久しぶりの学生/OB懇親の宴会を  
行った。

### 2. 2022年度決算報告 遭難対策基金収

支報告、創部100周年記念特別会計報告お  
よび監査結果報告(資料は、別表1(P41)、  
別表2(P42))

中西会計幹事より、2022年度決算報告、

遭難対策基金収支報告、並びに創部100年記念特別会計報告を行いました。

創部100年記念特別会計報告では、市川会員の大口賛助金200万円に加え、多くの会員から特別賛助金284万円が寄せられました。最終的には1,763,878円が剰余金となり、2023年度の一般会計の収入に繰り入れることとしました。また以上の決算報告は既に本間・佐藤（活）両監事より監査を受け承認された旨報告がありました。

## 決議事項

### 議案1. 2023年度活動計画

加藤総務幹事より、今期の活動について一括説明がありました。

#### 1) 会合

- ① 幹事会（2023年6月19日）
- ② 総会（2023年7月21日）
- ③ 新年会（2024年1月）
- ④ 卒業生をお祝いする会（2024年3月）
- ⑤ 三月会（原則毎月第3月曜日 1月／7月はお休み）
- 2) 学生支援
- 3) ① 学生幹事会の開催  
これまで同様に偶数月の第二水曜日夜にて開催予定。第1回は6月14日

#### ② OB／学生共同山行

具体的計画は未定。2～3回は行いたい。月見の宴（学生主催）も22年11月同様「鳩里庵」で行いたい。

#### 4) 針葉樹会会報発行

153号（2023年9月）、  
154号（2024年4月）を予定

#### 5) 懇親山行実施計画

- ① 2023年秋（紅葉） 9月23日（土）  
～24日（日）に尾瀬燧ヶ岳を予定
- ② 2024年2～3月（スノーシューで味わう雪山の雰囲気）
- ③ 2024年5月（新緑と残雪）

今年度は行く山を、会員からの希望を募って計画していきたいと考えている。また、地方での懇親山行も前向きに考えたい。ご希望の山をどしどし山行幹事までお寄せ下さい。尚、恒例の富士山ビューは行き先が一巡以上しているので暫くお休みの予定。

#### 6) ホームページ関係（兼総務関係）

- ① ホームページの内容工夫により、会員（特に若手OB）のアクセスを高める
- ・特設コーナーの設置 「創部百年記念誌」  
私の一枚等
- ・山岳部の山行記録転載他

#### ② ホームページの総務関係情報整理推進

・会員名簿メンテナンス継続

#### 7) 図書関係

- ① 部誌の補修（解体製本）
- ② 針葉樹文庫（芦安山岳館内）の入れ換え  
図書を部室本棚へ移管
- ③ 会員蔵書の部室保管

計画中の部室新設本棚の管理・利用方法について今後検討する

（OB寄贈蔵書の取り扱いを含む）

#### ④ 部室蔵書目録の改訂と公開（HP）

8) 南アルプス市芦安地区周辺の登山道整備事業

9月30日（土）～10月1日（日）の日程で4年ぶりに登山道整備を行う予定

#### 9) 創部100周年記念事業

- ① 百周年記念写真誌の補遺  
発行済記念誌の正誤表や掲載できなかった写真をまとめる予定

#### 10) 山岳部部室大改修

現在の部室が新築（1999年4月）されて24年が経ち、屋根や壁等、相当の劣化や痛みが見られる。部室の建設会社による外観仮調査の結果を踏まえ、今期大幅な修理・補修を行って、今後30年以上保てる建物としたい。ついては、前神会長を窓口として、山岳部と共同で以下の改修を進めた

い。

①修理概要と概算

部室の屋根、外壁の修繕、防腐剤、ペンキ塗り…3,200,000円

部室に至るコンクリート通路設置…300,000円

部室内設置の作り付け書棚…200,000円

予備費…300,000円

合計…4,000,000円

②時期と修理依頼先 今秋の改修工事を完了を目指す。

③修理依頼先 古溝建設

建物の痛み状態を精査し、詳細見積もりに入り、大学（部室所有者）の最終許可を経て、修繕作業を進める。

④予算と資金手当 2023年一般会計に一括計上（百周年特別会計及び一般会計余資を充当）

11) 会員の異動

本総会を以って、以下の4名の入会が承認されました。

- 山下 弘喜（2023年3月学部卒業）
- 猪股ひかり（2023年3月学部卒業）
- 岩崎 太一（2023年3月学部卒業）
- 平野 智士（2023年3月学部卒業）

議案2. 2023年度役員・幹事の選任

4人の新任幹事を含む2023年の役員・幹事の選任案が提示され選任されました。

	2023年度			
		卒年	就任	
山行幹事 (声安)	兵藤 元史	1977	2020.7	
	井草 長雄	1973	2019.7	
	齋藤 誠	1988	2019.7	
学生幹事	前神 直樹	1976	2011.7	
	古田 茂	1995	2014.7	
	山田 秀明	2003	2020.7	
	内海 拓人	2018	2018.7	
	佐々木 豪	2021	新任	
HP幹事	加藤 博行	1976	2018.7	
	金子 晴彦	1970	2008.7	
図書幹事	井上 仁	2022	新任	
監事	佐藤 活朗	1978	2019.7	
	本間 浩	1965	2017.7	

	2023年度		
		卒年	就任
会長	前神 直樹	1976	2021.7
副会長	兵藤 元史	1977	2021.7
相談役	中村 保	1958	2016.7
	竹中 彰	1964	2016.7
	小島 和人	1965	2021.7
	本間 浩	1,965	新任
総務幹事	加藤 博行	1976	2020.7
総務副幹事	岡部 寛史	1980	2021.7
総務副幹事	内山 晴貴	2022	新任
会計幹事	中西 茂	1981	2018.7
会報幹事	岡田 健志	1967	2016.7
	藤本 敏行	1976	2017.7

■:新規

議案3. 2023年度予算及び遭難対策基金

収支見込み(資料は別表3(p43))

中西会計幹事より、2023年度の予算説明があり、支出の部では、山岳部補助、針葉樹会報(2回発行)に加え、山岳部部室改修費用として4百万円を特別計上した旨の説明がありました。一方、収入では納入会費に加えて、百周年会計からの剰余金の繰り入れと従来からの剰余金を部室改修費用に当てる收支計画である旨、説明がありました。

一括質疑応答

議長より3議案についての一括質疑応答に入りました。

小島会員より、部室大改修については会員より賛助金を募ることの提案があり、前神会長より、是非実施したいとの表明がありました。(1999年の新部室建設では建設所要資金総額640万円の内、募金で580万円が集まりました。1999年9月針葉樹会報9号参照)

議案採決

暫くして、議長が3議案について決議を図ったところ、満場一致で原案通り承認されました。

決議終了後、山岳部浅香山主将、関副将より、

2022年度の活動、決算（別表4、P44）、今年度の山行計画（別表6、P46）、予算（別表5、P45）について報告がありました。

以上をもって、2022年度針葉樹会総会全議事を終了しました。会員の皆様のご協力有難うございました。

#### IV. 懇親会

総会終了後、テーブルの配置を変えて、6人の新入部員とOBが交流する形で懇親会に入り、小島相談役のご挨拶の後に乾杯発声を行い、4年ぶりのビュッフェ形式の食事を開始しました。

暫くして後、前神会長より挨拶がありました。

#### 前神会長

ご指名を受けましたのでご挨拶を致します。

山岳部創部101年目の挨拶ということですが、前期100周年記念事業では針葉樹会員各位、現役山岳部員にいろいろお世話になりました。百周年記念誌、北岳集中登山、拡大月見の宴と様々な催しが上手くいきましたのも皆様の尽力のお陰とっております。

さて今期針葉樹会も新しい活動年度に入っておりますが、ようやくこの三年間、活動を

総会出席者（2023年7月21日、如水会）



①加藤	⑥岡田	⑪宮田	⑱内山	⑳三宅
②佐藤(久)	⑦中村(雅)	⑫佐野	⑲関	㉑佐藤(周)
③兵藤	⑧中西	⑬川名	⑲石井	
④前神	⑨井草	⑭白石	⑲吉田	
⑤小島	⑩浅香	⑮稲毛	⑳大枝	

本間は途中退席

大きく制限してきたコロナが収束しつつあります。勿論コロナが終わったということではありませんが、制限がほとんどなくなっただという意味で、我々の山登りもようやく自由に行ける時期になってきました。常日頃、学生にはもっと多く、もっと長い山行をと鼓舞しておりますが、針葉樹会員各位も学生現役時代には、山登りに明け暮れた生活を送っており、山登りをやっていただきませう。本日の会場には、山岳部への新入一年生部員6人が全員参加してくれています。彼らが今後数多くの山行を行っていくことを、心から望むものでもあります。本日はこの場にてOB諸氏が、彼らと親しく懇談してもらえますようお願い致します。そうした懇親の時間の方が有意義です。弊方の挨拶は短くさせていただきます。現役学生やOB諸氏が、これからも積極的に山行を行ってくれることを祈念しております。ありがとうございます。

その後オンライン会員からの自己紹介を兼ねたスピーチがあり、竹中相談役より、各大学が次々と100周年を達成する中で、当山岳部の総合力は、今は海外遠征という形にはならないが、いずれまた力をつけて、海外の

山行を計画する位になってほしいと思う、との激励がありました。また、今年新たに針葉樹会員になったばかりの山下会員からフレッシュな会員第一声をいただきました。

次に今年入部した新人6名から自己紹介と山岳部でやりたいことのスピーチがあり、会員からは自分の入部経緯等の話があり、懇親会は食事をはさんで和やかに行われました。

最後に、加藤総務幹事より、恒例の山讃賦斉唱に際し、山讃賦の作詞者松崎武雄氏（1928年学部卒）の紹介と歌詞の補足説明があり、「山讃賦 創部百年統一歌詞」をホームページのピアノ伴奏音に沿って1、4番を高らかに斉唱しました。兵藤副会長の閉会の挨拶、記念撮影をして、懇親会をお開きとしました。

## 訃報

以下の会員が亡くなりました。謹んで報告いたしますとともに、ご冥福をお祈りいたします。

(総務幹事 加藤博行)

坂井 溢弘 (1966年卒)	2023年5月4日
茂木 俊明 (1958年卒)	2023年6月13日
上原 利夫 (1958年卒)	2023年9月20日
西牟田伸一 (1972年卒、元針葉樹会々長)	2023年9月23日
村上 泰介 (1964年卒)	2023年10月16日

## 別表 1

【針葉樹会2022年度 一般会計決算】  
(2022年6月1日～2023年5月31日)

(項目)	支出		収入		実績	子算	予算
	実績	子算	(項目)	実績			
① 針葉樹会報発行費	337,216	450,000	前年度繰越	5,245,176	5,245,176	5,245,176	5,245,176
② 山岳部補助	150,330	150,000	納入会費	2,626,000	2,626,000	650,000	650,000
③ 通信連絡費等	155,928	120,000	(普通会費)	(400,000)	(400,000)	(500,000)	(500,000)
④ 図書費	39,750	12,000	(賛助会費)	(2,226,000)	(2,226,000)	(150,000)	(150,000)
⑤ 日本山岳会費	14,000	14,000	預金利子・利息	48	48	40	40
⑥ Home page年間維持経費	100,330	100,000	寄付金	0	0	0	0
⑦ 図書館係費用	16,610	40,000	針葉樹会報販売代金	2,000	2,000	0	0
⑧ 芦安登山道整備	0	50,000					
⑨ 学生登山研修補助	49,979	60,000					
⑩ 合同登山補助	0	20,000					
⑪ 学生合宿補助	100,330	100,000					
⑫ 大学生質合OB/OG連絡経費	0	5,000					
⑬ 創部100周年記念準備経費	0	0					
(支出小計)	964,473	1,121,000	(収入小計)	2,628,048	2,628,048	650,040	650,040
次年度繰越	6,908,751	4,774,216					
(合計)	7,873,224	5,895,216	(合計)	7,873,224	7,873,224	5,895,216	5,895,216

(単位：円)

前年度繰越金 : 三菱UFJ銀行 5,245,176円  
(収入)  
・普通会費 : 52名  
・賛助会費 : 11名  
※S34市川さんから昨年度に続き、2,000kの大口賛助金を頂きました。  
(100周年記念誌でも同額の協賛金を載っております。)

(支出)  
・会報発行費 : 針葉樹会報 151/152号  
・通信連絡費等 : 総会・新卒学生お祝い会食事代等  
・図書費 : S39延川、S30須山、S33塩川、S23大島氏花代  
・図書館係費用 : 製本代  
・芦安登山道整備 : 新型コロナウイルスにて中止、未期間催予定  
・学生登山研修補助 : 夏山登山技術研修参加  
・学生合宿補助 : 夏山合宿関連  
・創部100周年記念準備経費 : 100周年記念勘定に計上

【針葉樹会2022年度運輸対策基金決算(案)】  
(2022年6月1日～2023年5月31日)

(項目)	支出		収入		実績	子算	予算
	実績	子算	(項目)	実績			
支出	0	0	前年度繰越	3,157,428	3,157,428	3,157,482	3,157,482
			うち運輸対策基金	2,257,428	2,257,428	2,257,482	2,257,482
			うち遠征基金	900,000	900,000	900,000	900,000
			利息等	54	54	63	63
(年度内実支出 小計)	0	0	(年度内実収入 小計)	54	54	63	63
次年度繰越	3,157,482	3,157,545					
うち運輸対策基金	2,257,482	2,257,545					
うち遠征基金	900,000	900,000					
(合計)	3,157,482	3,157,545	(合計)	3,157,482	3,157,482	3,157,545	3,157,428

三菱UFJ 定期預金 3,157,428円

## 別表2

## 【一橋山岳部 創部百周年記念事業関連予算/決算報告】 (2023年5月31日付)

(単位：円)

項目	支 出		収 入		備考
	予算 (22年新年会)	実績 (5/31付)	予算 (22年新年会)	実績 (5/31付)	
1) 百周年記念誌関係					
A) 記念誌発行費等	2,332,000	2,684,000 ※1)	1,500,000	2,000,000 ※2)	
B) 発送費、通信運送費等	225,000	83,000	1,500,000	2,840,000	
				65,000	
2) 計算機会計デジタル化関係					
C) ・会計デジタル化経費	250,000	257,000			18
D) ・最新会計デジタル化	0	131,354			
3) その他					
E) ・その他経費	193,000	50,000			
(百周年記念事業関連 小計)	3,000,000	3,205,000			
F) 4) 子種費	0	500,000			
	0	0			
		1,263,878			
(収入小計)	3,000,000	3,705,000	3,000,000	4,980,018	
次年度繰越					
(合計)	3,000,000	3,705,000	3,000,000	4,980,018	

注) 予算 (新年会) : 2022年1月臨時総会で承認された予算原簿

※1) 発行費増額理由 : カラーページ大幅増加、年表等によるページ数増加

## 【詳細内容】

## (支出)

・記念誌発行費 : 300部印刷費等 (ヤマノ印刷)

・会計デジタル化経費 : ヤマノ印刷、はまだ文具店利用関係経費

## (収入)

・市川会昌からの協賛金 (※2) :

市川会員 (59卒) より、創部百周年事業支援として、200万円を特別寄付頂きました。  
有難く本特別予算に150万円を充当し、50万円は別途予算と致します。

・2023年5月末付 特別協賛金及び記念誌販売による入金実績 : 4,980千円 (108名)

・配布明細 : 会員向け211部/学生向け18部 (学生へ16部、部室閲覧用2部)

協力者向け (写真提供者等) 28部/外部団体 (メトロ会) 15部/部外5部  
計277部、在庫23部 (他にヤマノ印刷無償提供9部あり、計32部)

【針葉樹会2023年度 一般会計予算(案)】  
(2023年6月1日～2024年5月31日)

2023/6/1

(単位：円)

項目	支出		収入	
	予算	前期実績	予算	前期実績
針葉樹会報発行費	360,000	337,216		
山岳部補助	424,000	314,639	6,908,751	5,245,176
①楽園閣修補助	(150,000)	(150,330)	650,000	2,626,000
②登山研修補助等	(114,000)	(63,979)	(500,000)	(400,000)
③夏合宿関係補助	(160,000)	(100,330)	(150,000)	(2,226,000)
通信連絡費等	200,000	155,928	0	0
総務費	40,000	39,750	40	48
Home page年間維持経費	100,000	100,330	0	2,000
図書関係費用	40,000	16,610	1,763,878	0
芦安登山道整備	100,000	0	0	0
台所登山補助	30,000	0	0	0
大学生育会O.B. O.G 連絡経費	6,000	0	0	0
大学山岳部室改修費用	4,000,000	0	0	0
(支出小計)	5,300,000	964,473	2,413,918	2,628,048
次年度繰越	4,022,669	6,908,751		
(合計)	9,322,669	7,873,224	9,322,669	7,873,224

(収入)

- ・普通会費 : 例年目標並み
- ・賛助会費 : 例年目標並み
- ※百周年記念誌協賛金A/Cは6月閉鎖し、剰余金を一般口座に繰入
- (支出)
- ・針葉樹会報 : 2回発行予定 (153/154号)
- ・山岳部補助内訳 :
  - ①山岳部楽園閣補助
  - ②日本山岳会での登山研修費(夏・冬)補助等
  - ③夏合宿関連交通費、テント場代、新人装備費補助
- ・通信連絡費等 : 総会、新卒者歓迎会、若手OB協議会経費等
- ・慶弔費 : 昨年並み
- ・Home page年間維持経費 : 昨年並み
- ・図書関係費用 : 合本費等
- ・芦安登山道整備 : 学生参加費用等含む
- ・台所登山補助 : 雷上訓練等OB交通費補助
- ・山岳部室改修費用 : 外壁補修/玄関前コンクリ通路/内壁取付け本棚設置等(概算)

・預金金利 0.002%を想定

【針葉樹会2022年度運継対策基金予算(案)】  
(2022年6月1日～2023年5月31日)

項目	支出		収入	
	予算	前期実績	予算	前期実績
支出	0	0	3,157,545	3,157,482
うち運継対策基金			2,257,545	2,257,482
うち遺証基金			900,000	900,000
利息等			63	63
(年度内家支出小計)	0	0	63	63
次年度繰越	3,157,608	3,157,545		
うち運継対策基金	2,257,608	2,257,545		
うち遺証基金	900,000	900,000		
(合計)	3,157,608	3,157,545	3,157,608	3,157,545

【第4表】一橋大学一橋山岳部 2022年度一般会計決算 (自2022年6月1日 至2023年5月31日)

(単位:円)

収入の部・項目	予算	実績	増減	備考
1. 前年度繰越金	108,417	108,417	0	
2. 針葉樹会補助金	324,000	313,440	▲10,560	
1. R4年度山岳部補助金	150,000	150,000	0	
2. 日本山岳会費・同多摩支部会費	14,000	14,000	0	
3. 研修補助金(夏山・冬山研修)	60,000	12,880	▲47,120	夏山リーダー研修 ¥12,880
4. 研修補助金(講習会等)	0	36,560	36,560	講習会費 ¥36,560
5. 夏合宿交通費補助金	100,000	100,000	0	
3. 部費	102,000	79,000	▲23,000	
1. 一般部員	56,000	36,000	▲20,000	
2. 雪山・登攀・沢 所属部員	20,000	25,000	5,000	¥5000×5名
3. 1年部員	26,000	18,000	▲8,000	¥2000×9名
4. 受取利子	1	1	0	
5. 新歓保証金	5,000	5,000	0	新歓委員会からの補助。
収入計	539,418	505,858	▲33,560	

支出の部・項目	予算	実績	増減	備考
1. 日本山岳会費・同多摩支部会費	14,000	14,000	0	
2. 装備購入費	128,000	173,160	45,160	
1. ザック	53,000	61,160	8,160	60Lのザック2つ。¥30,580×2。
2. 冬用アイゼン	30,000	30,000	0	雪渓訓練の為。¥10,000×3。
3. スリング	7,000	4,000	▲3,000	雪渓訓練の為。¥1,400×5。とリーダー研修用
4. 食器類	7,000	0	▲7,000	山中での調理の為。
5. ザックカバー	8,000	8,000	0	¥4,000×2。
6. ハーネス	6,000	14,300	8,300	
7. 装備レンタル費	17,000	17,000	0	雪渓訓練の為。
8. カム	0	12,000	12,000	登攀訓練の為。
9. ワイヤーカーピナ	0	800	800	登攀訓練の為。
10. 4人用テント	0	25,300	25,300	雪山班減員の為。
11. ガス缶	0	600	600	
3. 備品購入費	3,000	0	▲3,000	
1. 扇風機	3,000	0	▲3,000	部室の環境改善の為。
4. 事務費(コピー費・送金費)	2,000	0	▲2,000	
5. 山岳書籍等購入費	10,000	3,710	▲6,290	
1. 山岳書籍	7,000	0	▲7,000	部会講習用の参考資料や天気図用紙等。
2. 地形図・登山用地図	3,000	3,710	710	
6. 針葉樹会補助分	190,000	149,440	▲40,560	
1. 夏山・冬山研修	60,000	39,540	▲20,460	夏リーダー研修(参加費12880+交通費26660)
2. 講習会等	30,000	9,900	▲20,100	クライミング研修
3. 夏合宿交通費	100,000	100,000	0	
7. ヤマテン(山岳気象)会費	3,960	3,960	0	¥330×12か月。
8. 通信費	57,840	0	▲57,840	部室のWifi使用料。23卒山下さんからの寄付。
9. 共同装備修繕積立費	10,000	10,000	0	共同装備の修繕のための積立金。
10. 新歓費	30,000	27,000	▲3,000	新歓山行代。
11. 次年度繰越金	90,618	124,588	33,970	
支出計	539,418	505,858	▲33,560	

【第5表】2023年度一橋山岳部一般会計予算 (自2023年6月1日 至2024年5月31日)

(単位:円)

収入の部・項目	予算	前期実績	備考
1. 前年度繰越金	124,588	108,417	
2. 針葉樹会補助金	424,000	313,440	
1. R5年度山岳部補助金	150,000	150,000	
2. 日本山岳会費・同多摩支部会費	14,000	14,000	
3. 研修補助金(夏山・冬山研修)	60,000	12,880	夏山・冬山研修 各30,000円を想定。
4. 研修補助金(講習会等)	40,000	36,560	
5. 新入生装備補助	60,000	0	¥10,000×6名
6. 夏合宿交通費補助金	100,000	100,000	
3. 部費	87,000	79,000	
1. 一般部員	60,000	36,000	¥4000×15名
2. 雪山・登攀・沢 所属部員	15,000	25,000	¥5000×3名
3. JRO会費	43,560	0	¥3960×11名
4. 1年部員	12,000	18,000	¥2000×6名
4. 受取利子	1	1	
6. 新歓保証金	5,000	5,000	新歓委員会からの補助。
収入計	640,589	505,858	

支出の部・項目	予算	前期実績	備考
1. 日本山岳会費・同多摩支部会費	14,000	14,000	
2. 装備購入費	230,500	173,160	
1. ザック	79,500	61,160	80Lのザックを購入予定。¥26,500×3。
2. 冬用アイゼン	93,000	30,000	雪渓訓練の為。¥11,000×3。
3. 食器類	7,000	0	山中での調理の為。
4. ザックカバー	12,000	8,000	¥4,000×3。
5. 装備レンタル費	17,000	17,000	雪渓訓練の為。
6. バーナー	22,000	0	¥11,000×2。
7. スリング	0	4,000	
8. ハーネス	0	14,300	
9. カム	0	12,000	
10. ワイヤーカーピナ	0	800	
11. 4人用テント	0	25,300	
12. ガス缶	0	600	
3. 備品購入費	0	0	
1. 扇風機	0	0	
4. 事務費(コピー費・送金費)	2,000	2,000	
5. 山岳書籍等購入費	10,000	3,710	
1. 山岳書籍	7,000	0	部会講習用の参考資料や天気図用紙等。
2. 地形図・登山用地図	3,000	3,710	
6. 針葉樹会補助分	190,000	149,440	
1. 夏山・冬山研修	60,000	39,540	夏山・冬山研修 ¥30,000×2。
2. 講習会等	30,000	9,900	
3. 夏合宿交通費	100,000	100,000	
4. 新入生装備補助	60,000	0	¥10,000×6。
7. ヤマテン(山岳気象)会費	3,960	3,960	¥330×12か月。
8. 通信費	0	0	部室のWifi使用料。¥4820×12か月。
9. 共同装備修繕積立費	10,000	10,000	共同装備の修繕のための積立金。
10. JRO会費	43,560	0	¥3,960×11。
11. 新歓費	30,000	27,000	新歓山行代。
12. 次年度繰越金	150,129	124,588	
支出計	640,589	507,858	

【第6表】2023年度一橋山岳部年間計画

年	月	日	～	月	日	山域名	備考
2023	5	3	～	5	4	雲取山	新歓合宿
	5	3	～	5	8	奥秩父	中期縦走体験
	5	20				三つ峠	
	5	20	～	5	21	編笠山	
	5	20	～	5	22	ハヶ岳縦走	
期末試験(春学期)							
	6	3	～	6	4	芦安	登山道整備(順延)
	6	10	～	6	11	蓼科山	
	6	17	～	6	20	金峰瑞牆	
	6	24	～	6	25	鳳凰三山	
	7	1	～	7	2	甲斐駒・仙丈	
	7	8	～	7	9	尾瀬	
期末試験(夏学期)							
	7	25	～	7	28	白馬・朝日	1,2年夏合宿
	8	2	～	8	9	雲の平	上級生夏合宿
	9月	上旬				飯豊連峰	
	9	上旬				穂高岳	
	9	16	～	9	17	白馬	
	9	23	～	9	24	鳥海山	
	9	30	～	10	1	妙高山	
	10	7	～	10	8	燕岳	
	10	21	～	10	22	金峰瑞牆	
期末試験(秋学期)							
	11	11	～	11	12	大菩薩	
	11	18	～	11	19	伊豆大島	
一橋祭							
	12	2	～	12	3	低山トレーニング	
	12	9	～	12	10	低山トレーニング	

## 2023年7月針葉樹会総会案内状に寄せられた近況

2023年7月21日

卒年	お名前	参加/不参加 /オンライン	近況 (出欠に加えてメッセージがあったもののみ掲載しています)
1955/ 昭30	石原 脩	不参加	昨夏の脊柱管狭窄症手術を克服。目下、八ヶ岳・横岳東陵1,600mの山荘で、歩行訓練と鹿害を免れた山野草保護のための雑草とりの毎日です。定年後始めた学生時代からの趣味、声楽を続けていることも健康に役立っているようです。
1956/ 昭31	石和田 四郎	不参加	90年の老木、何時「ポキッ」と折れるやら、と言うところ。6月に、オーション会の生き残り、佐藤、松尾、宮川、小生の4人久しぶりに、種子島のアンノウ焼酎で歓談しました。次回は秋、元気で居ろよ！と再会を約しました。 針葉樹会、貴兄たちの世代中心で100周年も立派にクリアして頂き、今後に向けてもお骨折りをいただき感謝しております。総会の盛会を祈っております。 急に酷暑襲来、諸兄弟の益々のご健勝を祈っております。
1958/ 昭33	中村 保	不参加	小生相変わらず腰痛に悩まされていますが、落ち込んでいません。リハビリに励んでいます。 若干歩行困難ですので外出には歩行器を使い、家内かトレーナーの介助が必要です。真面目に対応しています。しかし大衆交通機関を利用した遠出はまだ無理ですが、車で何処へでも連れてってもらっています。
1958/ 昭33	加地 幸雄	不参加	例年のように、のろのろ歩きを続け、今年前半の山行日数は27日。低い山は暑くなってきたので、少しずつ高度を増し、去る6月27日には2900mまで登りました。残雪と新緑の調和が見事でした。
1959/ 昭34	市川 陽一	不参加	長年、遺伝的に患って居ります難聴が更に嵩じて、通常の会話が聞き取れぬ以外は体調は比較的良好です。但し、昨年転倒しての腰椎圧迫骨折の後遺症で、眼前の比叡山中腹に毎週出かけていた水汲みが頓挫しているのが残念です。回復に努めていますが、年令的に無理かと思つて居ます。総会の大成功を祈念致します。
1960/ 昭35	丸子 博之	不参加	小生5月末コロナに感染、なんとか生き延びましたが、担当医より当分外出禁止の指示あり、残念ですが欠席致します。盛会であります様。
1960/ 昭35	中西 巖	不参加	この6月中旬上高地に入ってみた。高山方面からは平湯トンネル、安房トンネルの開通により格段に入りやすくなった。梅雨の晴れ間、かっぱ橋からの穂高連峰は、前穂高、間ノ岳、ジャンダルム、奥穂高、前穂高、明神と全て見渡せ、至福の時を楽しみました。大正池から明神池あたりまで散策、明神池では、穂高神社に参拝、神職の案内で、池を周遊、楽しい一時を持ってました。上高地帝国ホテルに2泊しましたが、年内はすべて満室、来年は、2月1日から受け付けますとのことでした。
1961/ 昭36	遠藤 晶士	不参加	生きたいように生きてきたのに、死にたいように死ねないのが不思議です。
1964/ 昭39	竹中 彰	オンライン	最近専ら低山歩きです。支部の同好会(低山を楽しむ会)、緑爽会、昼から会などですが、先日、本間さん達と久しぶりに大山詣りにでかけましたが、奥多摩、丹沢辺りでも身体に堪えるようになって来ました。7月中旬には針葉樹会の仲間と蛭川さんの新盆の墓参を兼ねて久しぶりの北海道アンヌプリを目指しました。支部の同好会「山の唄を歌う会」で月に一回八王子の公民館で懐かしい山の唄、昔の唱歌なども歌って昔を偲んでいます。春には本間さん、岡田さんに加えて昔の住高山岳部(橋本、村上、門脇さんなど)の仲間も丹沢の小屋に集って青春の一時を過ごしました。 昨年は一橋でしたが、5月は明治大、6月は東大とこのところ毎月大学山岳部百周年記念行事が開かれ、11月には立教も百周年の祝賀会を予定している様です。物入り続きでソロソロ引退の潮時と思っています。なお、9月19日(火)にはメトロ会懇親総会が池袋のホテルメトロポリタンで開催されます。この辺りも含めて前神さん宜しくご検討下さい。
1965/ 昭40	小野 肇	不参加	蛭川さんの偲ぶ会の札幌開催とお墓参りならびに蛭川さんの思い出の北海道の山行の計画も決まりました。
1968/ 昭43	中村 雅明	参加	今年の前半年の山行は登山意欲旺盛な本間浩先輩のお世話になりました。「丹沢お花見会」の2月の寄のロウバイ、3月の西平畑公園の河津桜に参加させてもらい、軽い山歩きを兼ねたお花見の楽しさを味わいました。また、6月中旬に「88歳米山山行」を目標とされている越後の米山(993m)にも誘っていただきました。無精者の私にとって有難い先輩です。 7月中旬にコロナで3年間延期した北海道山行を予定しています。前半のニセコアンヌプリは10名参加、後半はアポイ岳に6名で登ります。その間の札幌での懇親会&故蛭川先輩の墓参りには12名が参加します。札幌在住の小野肇先輩に全般的にお世話になります。また、図書幹事を2009年に新設された時から14年間務めてきました。部室図書、先輩蔵書の整理が未了ですが、この総会で退任させていただきます。 長年、皆様にはお世話になりました。

卒年	お名前	参加/不参加 /オンライン	近況 (出欠に加えてメッセージがあったもののみ掲載しています)
1971/ 昭46	金子晴彦	オンライン	矢掛の3大プロジェクト(重伝建認定、無電柱化、道の駅導入)が完成、入込客数が30万人から50万人台に増加してこの10年の観光振興事業は一段落しました。「クリームソーダの町矢掛」などという14軒のお店が固有のクリームソーダを提供する思いがけないイベント開催、そして、大名行列、鼓の会の一行100名が東京の国立劇場にお邪魔してパフォーマンスを展開、打ち上げとなりました。これを機会にDMOは退任し、現在は僕としては本業ともいえる「とと道トレイル」の仕上げに入っています。狙いは中国地方の鯖街道となるであろう国交省による夢街道ルネサンス認定取得。60?のトレイルを将来的に維持するにはこうした認定をいただき、行政に目をかけていただかないと無理と判断、慣れないお役所通いをして、8月に認定申請の運びとなりました。審査の上の決定は年度末になるそうです。先日ご本尊の鯖街道に出かけましたが、福井と京都の間に70?に及ぶあれだけの通商路が有り、その急坂を重荷を背負って往來していたことに驚きました。小入谷の古民家ホテルに泊まりましたが正に雪国。商売という人の営為の力に改めて敬意を表した次第。やや小さな規模ながら備中と道もその係果です。ついでにユネスコの未来遺産への登録をしるとの推薦も出て来てこれまた一仕事です。この関係では先日トレイル沿いのぶっぼうそうの人工営巣地帯を訪問、あちこちで見事な姿に出会えました。来年は落ち着くのではないかと思います。その折には野菜つくりの本格化ができていますと幸いです。
1973/ 昭48	松尾信孝	不参加	この5月を持ちまして、2期務めました鳥取県日野町議員の職を辞しました。この8年間、地方の疲弊を目の当たりにしてきました。今話題となっているマイナ問題も、現場職員の現状を見れば、むべなるかなという感じです。個人的には非常に貴重な経験をさせてもらいました。
1977/ 昭52	兵藤元史	参加	70歳になって、信州弁で言う「ずく」がとみに衰えているように思われます。山への意欲も薄くなってきました。が、8月上旬には上ゴロ(上高地ゴロゴロ)をまたやるつもりです。そのうちにご案内メールを発信致しますので、上高地来訪を是非ご検討下さい。
1979/ 昭54	神野隆	不参加	4月から家内の事業所での勤務も週2日に減らしています。来年3月末には完全リタイヤの予定です。皆さまよろしくお伝えください。
1980/ 昭55	米田篤裕	不参加	たまたま旅行の予定はが入っており、参加できません。盛会を祈念しております。
1984/ 昭59	安島孝知	不参加	病院の経営にいそしんでおります。
1985/ 昭60	石丸義男	不参加	富山に帰郷し、3年余となりましたが、平々凡々田舎生活を謳歌しております。日々拝む立山連峰は神々しく、特に、富山湾から(又、湾沖から)見上げる勇姿は三国一と思って仕舞います。今年3月に岡山県矢掛町でDMO理事長をされていた金子大先輩にお会い致しました。
1986/ 昭61	白石章治	参加	「グレートヒマラヤトレイル マナスル 日本人が愛した山」を制作中です。
1988/ 昭63	齋藤誠	不参加	母校、会津高校で、定年後を見据えながら、母親と2人暮らし。(妻は勤務先の福島市で1人暮らし)6月秋田駒、7月飯豊、8月剣の予定です。機会があれば会津高校山岳部の皆さんともご一緒したいと考えています。
1995/ 平7	古田茂	不参加	浅間山のバリエーション、魔道ランを楽しんでいます。なかなか変化があつておもしろい山です。
2003/ 平15	山田秀明	不参加	最近、全く山に登ってません・・来年になれば、再開できると思っ、日々、ジョギングに努めてます。
2018/ 平30	大矢和樹(オンライン)		豪・クイーンズランド大学に2年間大学院留学することになりましたので、欠席させていただきます。南半球にいる間も、登山などアウトドア出来ればと思っています。
2020/ 令2	福家一裕	不参加	国交省に出向中です。大変恐縮ではございますが、予定が合わず、今回は出席見送らせていただきます。
2022/ 令4	井上仁	不参加	最近、全く山に登ってません・・来年になれば、再開できると思っ、日々、ジョギングに努めてます。
2023/ 令5	山下弘喜	オンライン	3月に商学部を卒業しました。4月より神田神保町で働いています。主に公共部門向けのデータベースシステム・地理情報システム等の設計～保守をしておりますが、ご縁があれば民間も・・・と考えています。

## 学生の活動記録

### 奥秩父縦走

田村 健(社2)

#### ☆メンバー

浅香俊敬(C.L、経3)、関響太郎(S.L、法3)、田村健(装備/記録、社2)

#### ☆コースタイム

5/3(快晴)

0932 三峯神社約2km手前車道---1000 三峯神社バス停 1039---1056 妙法ヶ岳分岐---1152 地藏峠---1159 霧藻ヶ峰 1204---1209 霧藻ヶ峰休憩舎---1223 お清平 1229---1313 前白岩山の肩 1317---1332 前白岩山 1333---1402 白岩小屋 1403---1423 白岩山---1520 大ダワ 1521---1551 雲取山荘

5/4(快晴)

0558 雲取山荘---0624 雲取山 0641---0642 雲取山避難小屋 0644---0701 三条ダルシー---0737 狼平---0804 ミッ山---0918 北天のタル 0919---0938 山頂近道分岐 0939---0955 飛龍権現神社 1005---1009 禿岩 1011---1037 大ダル---1215 将監峠 1240---1250 牛王院平---

1257 山ノ神平---1511 黒エンジュ 1532---1541 シラベ尾根---1611 笠取小屋

5/5(快晴)

0601 笠取小屋---0611 雁峠分岐---0619 雁峠---0702 燕山 0704---0808 水晶山---0832 雁坂峠 0849---0935 雁坂嶺 0941---1043 東破風山---1107 破風山 1124---1156 破風山避難小屋 1203---1324 木賊山まき道分岐---1344 甲武信小屋

5/6(晴れ時々曇り)

0556 甲武信小屋---0608 甲武信ヶ岳 0616---0631 2353m地点---0651 水師---0720 富士見 0729---0751 両門ノ頭 0753---0844 東梓 0853---0932 国師ノタル---1159 国師ヶ岳 1207---1215 三繫平---1220 北奥千丈岳 1222---1232 三繫平---1235 前国師ヶ岳---1252 夢の庭園 1254---1306 大弛小屋

5/7(雨)

0415 大弛小屋---0519 アノウ平登山口(アコウの土場)---0640 鶏冠山林道(西線)起点---0648 六本檜峠---0712 柳平ゲート

#### ☆行動と感想

5月3日、水曜日。玄関を開けると、爽や

かな春風を肌を感じた。夜明け前の風だというのに、ほんのり暖かい。これから始まる長期山行に思いを馳せ、駅へと向かう。午前8時、西秩父駅に馴染みのある顔を見つける。今回の山行は、新入生の確定合宿(雲取山)と、初日のみ同じ行程に設定している。本来は、例年通り、鴨沢から七ツ石小屋を経由して登るはずであったが、今年は5月に雪渓訓練を実施するべきだという案が出ており、急遽、確定合宿の日程が1週間ほど前倒しになった結果、連休中の七ツ石小屋の予約を押さえることが難しくなった。雲取山荘であれば予約不要なため、三峯神社からのルートを選択したという運びであった。4名の新入生は、既に十分に経験がある者、初めて本格的に登る者など様々な顔ぶれであったが、いずれもすっきりとした表情で、これから始まる山行を待ち望んでいるかのように見えた。奥秩父山行に3名、雲取山に10名、計13名の大所帯であったが、その中でただ一人、浅香さんの姿だけ見つかからない。電話をかけたところ、8時4分に駅に着くとのことだった。乗る予定のバスは8時発。そこで、残りの12名は予定通り出発し、浅香さんのみ次発8時半の便で追いかける、という形をとることにした。8時の始発便は、ものすごい数の乗客であった。待機列が幾重にも折り返され、結

局バス3台がいつぱいになった状態で発車した。我々は早い時間から並んでいたため、全員が座席に座ることができた。しかし、5日分の装備が入った僕のザックは、膝の上に置かざるを得ず、窮屈であった。バスに揺られること約1時間半、三峯神社まで約2kmという地点で、駐車場を待つ車の渋滞にはまってしまった。考えてみれば大型連休の初日の朝、渋滞するのも不思議ではない。計画の段階では渋滞について何ひとつ考慮していなかったため、この時は少し不安になった。渋滞のとまで考えて、余裕を持った行動予定を立てるべきだと学んだ。バスの運転手のご厚意で、渋滞の中で途中下車し、車道を歩くことになった。長期縦走の幕開けが車道歩きになってしまったことについて、個人的にはかなり精神的にダメージを受けた。30分ほど歩いて、三峯神社バス停に到着した。

トイレを済ませた後、雲取山チームが2パーティに分かれて出発して行った。そこから5分も経たないうちに、浅香さんが到着した。浅香さんも車道をかかなり歩いてきたそうだ。渋滞がもつと続いていたはずなので、僕たちより歩いた距離が長かったことだろう。しかし到着が思いのほか早く、その健脚ぶりがかがえた。

三峰口からの登りは急登が続いた。また、

他の登山者が非常に少なく、静かな印象も受けた。最初の休憩で、雲取山チームと合流し、道の間違えていないことを確認できて安心した。その後も長い道のりが淡々と続いていたが、同期のハンギョルが途中、暑くなって長ズボンを捲し上げていたことが、鮮烈に記憶に残っている。

お清平を過ぎたところには派手な岩場があり、新入生が一発目に登る山としてはやや酷だと感じた。来年度以降、もしこのルートを使う場合は、覚悟を持って臨んでほしい。それでもなんとか、13名全員が雲取山荘に日の入り前に到着できた。1年生の顔には疲労の色が見られた。大勢の他の登山者が既に到着していて、色とりどりのテントが並んでいた。ほとんど張るスペースがなかったため、4張のテントを別々の箇所に分かれて設営した。

我々はキムチ鍋と、メにうどんを食べた。本来こちらとしては、1日目のみ雲取山チームの食事をお裾分けしてもらおう、ということとで暗黙の了解をしていたのだが、うまく意思疎通ができておらず、雲取山チームの鍋が10人前しかないことがわかったので、渋々ながら翌日以降の夕食を繰り上げたのであった。キムチ鍋の素は、浅香さん曰くキューブ状のものが売り切れていたそうで、ストレート状のものを持ってきていた。重かったことに違

いない。味はとても美味しかった。学習したことといえば、乾麺のうどんは、茹で汁を飲む処理が大変、ということである。塩分が高いただけでなく、粉物特有のヌメリがあつて、非常に飲みづらさを感じた。うどんを食べた場合は、流水麺のような生麺を持参するのが良さそうである。結局、その夜はトイレにも歯磨きにも行くことなく、気づいたら寝てしまっていた。予想外の車道歩きと長い登りの連続で、非常に疲れが溜まったようである。

5月4日、木曜日。雲取山チームは朝の4時ごろに出発したそうで、彼らの姿を見たのは3日の夕方が最後ということになった。目が覚めると既に日が昇り、明るくなっていた。雲取山チームが今頃どこを歩いているだろうかと考えながら、支度を進めた。トイレが土足禁止で、登山靴を着脱しなければならぬのと、ただでさえものすごい行列ができており、思ったより時間がかかってしまった。

予定よりも1時間ほど遅く、6時前に出発することになった。雲取山荘の玄関口には鯉のぼりが飾られていた。それを見て、翌日がこどもの日ということを思い出す。距離にして18・4km、今回の山行の最長距離を歩く1日が始まる。とはいえ、僕はこの時は気分がよかった。念願の東京都最高峰まで、あと一

歩に迫っていたからだ。昨年5月にやや遅れて入部した僕は、雲取山の確定合宿に参加できなかった。高校時代も、雲取に登ったことは1度もなかった。雲取山は、ずっと登ってみたいと思っながら行けていなかった、憧れの山だった。

30分弱歩いて、山頂に到着した。富士山がくつきりと見え、とても満足した。少ししてどこかの高校山岳部の集団が登ってきて、関さんが写真を撮ってあげていた。男女の人数のバランスが同じくらいで、とても楽しそうであった。彼らの中から、数年後に一橋山岳部に入ってくる人がいるかもしれない。山頂では、少し靴擦れの兆しがあったので、かかとに絆創膏を貼った。この早目のケアが、後々功を奏することとなる。山頂から少し下ると、雲取山の避難小屋があった。雲取山荘で長時間並ぶくらいだったら、少し我慢して、こちらのトイレで済ませた方が効率良さそうだと思う。

石尾根を横目に、ここからはひたすら西へ向かう。この日の午前中の会話は、「何でもいいから面白い話」というお題だったように思う。関さんは南スーダンの紛争の話をしていった。僕は三角州とアスワンハイダムについて語った。途中の休憩では、浅香さんがじゃがりこを分けてくれた。僕も今回初めて挑戦し

た、ドライマンゴーをお裾分けした。今思うとこのドライマンゴーは、行動食としての適性がとてもあった。軽くてカロリーが高く、何より糖分が疲れた体に嬉しかった。我々の大きな装備を見て、どこまで行くのか、あるいはどこから来たのかと、他の登山者たちに度々質問された。笠取小屋までと答えると、とても驚かれた。どうやら雲取山の次には、将監小屋で一泊というのが普通みたいである。その後も、しりとりと山手線ゲームで気を紛らわせつつ、歩いていった。途中僕が関さんの後ろにピツタリとくっついて歩きすぎて、ザツクの死角に隠れた枝に顔を派手にぶつけて出血するという初歩的な大失態があったが、運よく大事には至らなかった。

12時すぎに将監峠に着いた時には、3人とよく似た状態であった。ヤマレコを見て初めてわかったが、実に25分の間、ここで休んでいたことになる。だがしかし、この日本当にきついのはここからだった。将監峠から、唐松尾山・笠取山の稜線を歩くルートと、笠取小屋までひたすら巻き続けるルートがあり、登る気力が残っていなかったために後者を選択したのだが、これが悪路の連続だったのである。土が抉り取られ通行できないほどの荒れ模様になっている場所や、倒木

が行く手を阻み、上から跨ぐことも下からくぐり抜けることも大変な箇所などが続いた。浅香さんは、5日間を振り返って、このトラバースが最も大変だったと供述している。笠取小屋直前の黒エンジュでは、浅香さんと関さんは土の上で思わず仰臥していた。また、電波が繋がったので、Statusを確認し、雲取山チームが無事下山できたことを知ると同時に、自分達の入山報告が送信できてなかったことに気づき、再送信をした。入山報告は、電波が安定しているうちに早めに確実に送ることを心がけようと思った。

笠取小屋に着いたのは16時過ぎ。10時間以上行動していたことになる。小屋の方々が非常に歓迎してくださった。水場で顔を洗って水を汲んだ後、小屋で飲み物を少々買って乾杯をした。シカの群れがテン場の近くに來ていたため、写真と動画を撮った。この日の夕食はご飯と麻婆春雨であった。浅香さんは今回も完璧に炊き上げた。蒸らしの際は、自身の衣服に包んで熱を逃さないようにするなど、熟練の技であった。僕も早く習得したい。消費エネルギーが大きかったせいとか、お腹がいっぱいにならなかった。この日もすぐに眠りについた。

5月5日、金曜日。山行3日目の朝である。僕は今まで2泊3日（それも3日目はほとんど行動していない）の山行が最長であったため、ここからは未知の領域に入ってくるというところだ。笠取小屋を出発して雁峠まではよかつたのだが、そこから燕山にかけてかなりの急傾斜が始まった。なお僕は、今回最もきつかったのはこの上りだった。この頃になると、かかとの靴擦れが悲鳴をあげ始めていた。だが、2日目に貼った絆創膏のおかげで、出血は免れたようだった。

雁坂峠から先は、1度来たことがあるため安心感があつた。そこから甲武信小屋まで、昨年7月に浅香さん・清水くんと来た道を思い出しながら、懐かしい風景が続いていた。雁坂嶺の山頂では、陽気な2人組のおじさん方に会った。写真のポーズを楽しそうに決めていらつしやつた。曰く、甲斐駒ヶ岳の山頂では、（こまという響きから）コマネチのポーズするのがいいとのことである。東破風山の山頂では、今年で喜寿を迎えるおばあさんに出会った。この方は毎年この時期に、決まって輿秩父を歩いていて、笠取小屋の人とも親交があるそうだ。同じく山好きの夫に先立たれ、今は介護施設で自分よりも年下を介護する生活をしていると、語っていらつしやつた。また、深南部の笹ヶ岳を気に入っ

ているようで、その話も面白かつた。山での一期一会は、特に貴重なものである。

破風山の辺りで、初めて残雪が出てきたように思う。この日は、文部省唱歌を歌うなどして気を紛らわせた。国立、公立、私立と、出身がそれぞれ全く異なる僕ら3名が、曲を習ってから時間が経った今でも、同じように歌えることに感動を覚え、日本の音楽教育はすごいという結論に達した。

木賊山分岐までの登りはやはりきつかつた。今回の山行ではだいたい浅香さんか関さんが先頭を歩き、僕は基本的に最後尾でついていくという形をとっていたが、この登りのときは僕がついていけず、先輩2人の足を引っ張ってしまった。甲武信小屋直前になると、積雪量も本格的に増えてきた。甲武信小屋に着いたのは13時半すぎ。予定よりかなりの時間がかかつてしまった。僕が高校時代のTシャツを着ていたため、到着してすぐ、船橋の方々ですかと訊かれてしまった。やはりこの部でもTシャツを作って、堂々と正しい所属を示すべきであると感じた。話しかけてきたこの小屋の若兄貴は、実家が北習志野にあるらしい。余談ではあるが、北習志野は習志野市ではなく、船橋市の地名である。束の間の船橋トークができて、嬉しい気持ちになった。その後は、30代くらいのお兄さんと

しばらく談笑していた。あとは、この日に能登で震度6の地震が起こったという、他の登山者の話が耳に入ってきて驚いたのを覚えていた。風がやや出始めていたので、僕はテントに入って休んでいた。先輩2人はベンチでゼミの本や英文を読んでいた。山でも勉強する姿を見て、まさに文武両道だと尊敬の念を抱いた。この夜、最終日の天気が崩れるという情報がわかり、金峰山・瑞牆山には行けないだろうという目処がついた。しかしいざそれにせよまだまだ先は長いので、明日に備えて眠った。

5月6日、土曜日。甲武信小屋は標高が高いからか、朝の冷え込みは厳しかつた。また、大きな音があちこちで響くくらい、風も強く吹いていた。甲武信小屋のトイレは山のものとは思えないくらい綺麗だった。甲武信ヶ岳は風が強すぎて手短に通過した。そこからひたすら樹林帯を歩いていった。倒木がかなりあつたように思う。途中、大学生らしき集団が国師ヶ岳側から歩いてきて、学生どうしお互いがんばりましょうと挨拶を交わした。

富士見という地点は全くの嘘で、何も見えなかつた。僕は喋る気力も出ず黙っていたが、浅香さんと関さんは相変わらず難しそうな学術的話題で盛り上がっていた。覚えている限



2023.5.6 国師岳にて 撮影：田村 健

りでは、ホモサピエンスに至るまでの、喉の構造の変化と言語との関係のような会話をしていたはずだ。

国師ノタルを過ぎてからは、雪がすごい量になっていった。踏み抜きで足を取られ、体ごと崩れてしまったことも何度もあった。3人ともかなり体力を奪われた。

やっとの思いでたどり着いた国師ヶ岳は、それは美しい山だった。広い山頂で、とても開放感があった。三繋平にデポして、奥秩父最高点である北奥千丈岳も登頂した。天気が下り坂になっているのをひしひしと感じたため、いずれの山頂でも、それほど長居はしなかった。三繋平から先は、よく舗装された木道になっていた。なめらかな表面のおかげで足裏には優しかった一方で、とても硬さがあって膝にはきつかった。大弛小屋では、主人が出迎えてくれた。登山道の状況はアイゼンをつけるほどではなかったこと、おそらく僕ら以外に登山者がいなかったことなどを伝えた。主人曰く、5月のこの時期は、大弛峠の車道ゲートが閉鎖されていて、登山者がいい意味で洗練されているから、対応するのが楽なのだとか。テントを張り、少し休んだのち、車道沿いに腰掛けて、3人で今後の山岳部について、どういう部活にしていったり良いかということについて語り合った。この時間は大変貴重だったと思う。

5月7日、日曜日。最終日は3時に起床した。大雨の中、苦勞してテントを片付け、車道をひたすら下っていった。6時を過ぎた頃に、塩山タクシーに電話をかけ、六本楯峠まで配車をお願いしたところ、もう少し下った柳平ゲートまででないと、車が通行できない

とのことであった。山と高原地区には六本楯峠から、タクシーの目安時間と料金の案内があったのだが、やはりこうした情報は変わりやすいものだと思った。そうして、柳平ゲートに7時半という約束をした。7時すぎに、余裕を持って到着することができた。

下山報告を済ませ、顧問の小西先生へのメールを送信した。5日間の総歩行距離、約65km。達成感はひとしおであった。その後、タクシーで塩山温泉宏池荘に向かい入浴。靴擦れでポロポロの足と、顔面の傷には、成分がよく染みて痛かった。その後塩山駅まで歩き、国立まで戻り、部室に荷物を置いて、ステーキキヤス国立店にて、食事をした。久しぶりの下界でのご飯は美味しかった。今後は、山岳部の人とご飯に行ったりすることも、増やしていきたいものである。部室に戻って、装備を返却して解散した。充実した5日間であった。

2023年1月～8月 山行実績表

一橋大学山岳部

時 期					コ ー ス	メ ン バ ー	
年	月	日	月	日			
2023	1	14	～	1	15	唐沢・桜平分岐-黒百合ヒュッテ-天狗岳-黒百合ヒュッテ-唐沢・桜平分岐	佐々木(M2、CL)、岩崎(法4、SL・記録)、浅香(食事・経2)
	2	5				瑞牆山荘-大日岩-金峰山-大日岩-瑞牆山荘	佐々木(M2、CL)、岩崎(法4、SL)、猪股(社4、記録)、浅香(経2)
	2	12				高尾山口-高尾山-陣馬山-相模湖	佐々木(M2、CL)、猪股(社4、SL・記録)、浅香(経2)
	2	18	～	2	19	八方小屋-唐松岳-八方小屋	佐々木(M2、CL)、岩崎(法4、SL)、猪股(社4、記録)、浅香(経2)
	2	25				三本松-竜頭の滝-湯滝-三本松	浅香俊敬(CL、経2)、猪股(社4、SL)、田村健(記録、社1)、清水慧介(社1)
	3	22	～	3	23	樽池高原-白馬大池-白馬乗鞍岳-白馬大池-樽池高原	佐々木(M2、CL)、岩崎(法4、SL)
	4	9				高尾山(新歓山行)	田村(CL/記録・社2)、櫻井(法3)、黒川(法2)、吉川(社2)、大枝(商1)、三宅(社1)、吉田(法1)
	4	16				御岳山・日の出山(新歓山行)	関(CL・法3)、重岡(SL・社3)、中林(記録・法2)、佐野(法1)、宮田(社1)
	4	23				高尾山(新歓山行)	清水(CL・社2)、亀井(経2)
	4	29				高水三山(新歓山行)	吉川(CL・社2)、清水(社2)、石井(社1)
	5	3	～	5	4	八峰神社-雲取山-七つ石山-鴨沢	塚本(CL・経3)、清水(SL・社2)、亀井(装備・経2)、吉川(食料・社2)、黒川(記録・法2)、高(記録・社2)、大枝(商1)、佐野(法1)、三宅(社1)、吉田(法1)
	5	3	～	5	7	八峰神社-雲取山-笠取山-甲武信ヶ岳-国師ヶ岳-大池小屋-柳平	浅香(CL/食料・経3)、関(SL・法3)、田村(装備/記録・社2)
	5	20				三つ峠駅-三つ峠山-河口湖駅	田村(CL・社2)、大枝(記録・商1)、佐野(記録・法1)
	5	20	～	5	21	小淵沢駅-観音平-青年小屋-編笠山-観音平-小淵沢駅	清水(CL/記録・社2)、石井(社1)、三宅(社1)、宮田(社1)、吉田(法1)
	5	20	～	5	22	小淵沢駅-観音平-編笠山-青年小屋-権現岳-赤岳-横岳-硫黄岳-天狗岳-高見石小屋-麦草峠-北横岳-蓼科山-登山口-滝の湯入口	半澤(CL/装備/記録・社4)、下西ノ園(SL/食料・経3)
	6	10	～	6	11	蓼科山七合目登山口-蓼科山-蓼科山七合目登山口	清水(CL/装備・社2)、塚本(SL/記録・経3)、亀井(食料・経2)
	6	17	～	6	18	瑞牆山荘-富士見平小屋-瑞牆山-富士見平小屋-金峰山-富士見平小屋-瑞牆山荘	田村(CL・社2)、浅香(SL・経3)、黒川(装備・法2)、中林(記録・法2)、吉川(社2)
	6	24	～	6	25	夜叉神峠-南御室小屋-薬師岳-観音岳-地藏岳-白鳳峠-広河原	下西ノ園(CL/装備・経3)、櫻井(SL・法3)、吉川(食料・社2)、吉田(記録・法1)、三宅(社1)、佐野(法1)、石井(社1)、宮田(社1)
	7	21	～	7	23	猿倉-白馬鍔温泉-白馬頂上宿舎-白馬岳-白馬大池-樽池高原	半澤(CL/装備/記録・社4)、下西ノ園(SL/食料・経3)
	7	25	～	7	27	折立-太郎平-薬師岳-太郎平-薬師沢-雲ノ平-鷲羽岳-水晶岳-雲ノ平-高天原-雲ノ平-三俣山荘-黒部五郎岳-三俣山荘-槍ヶ岳-横尾山荘-上高地バスターミナル	田村(CL・社2)、大枝(SL・商1)、浅香(装備・経3)、石井(記録・社1)、佐野(食料・法1)、宮田(食料・社1)、櫻井(法3)、黒川(法2)、高(社2)、中林(法2)、前田(法2)、三宅(社1)、吉田(法1)
	8	2	～	8	8	雲ノ平(夏合宿②)	浅香(CL/食料・経3)、下西ノ園(SL・経3)、田村(装備・社2)、吉川(記録・社2)

### 三四郎会開催

三四郎会の初回開催時(2006年)の幹事が5月に亡くなった坂井溢弘会員でした。

その坂井会員を偲んで、初回と同じ真鶴半島のペンションにて、5年ぶりに三四郎会を開催しました。(吉川会員は宿泊せずに帰宅)

写真

左から 岡田(1967)、中村(雅)(1968)、原(1966)、吉沢(1967)、本間(1965)、小島(1965)、佐藤(久)(1966)、半場(1965)、小野(1965) ( )内数字は卒年



2023年9月15日 真鶴「SHIOSAI」前で

### 芦安・高谷山登山道の補修作業

井草 長雄(1973年卒)

2019年5月の作業を最後にコロナ禍で中断されていた南アルプス市の高谷山を巡る登山道補修作業が4年ぶりに再開されました。当初、6月実施の予定でしたが悪天候のため、9月30日・10月1日の土日に行いました。

参加者は、針葉樹会から本間、小島、中村(雅)、井草、兵藤、佐藤(活)それに学生の浅香、宮田、吉田、佐野の計10人プラス窪田(井草同伴者)。そして芦安ファンクラブの清水会長ほか延べ6人、富士通アイネットの多田社長ほか4人が参加しました。



2023.9.30 芦安ファンクラブ事務所前にて 撮影：岡本誠(富士通アイネット)

今年の夏の暑さは格別でした。また、関東南部では雨が少なく植物にも過酷な夏だったのではないかと思います。米どころの今年の出来ばえが懸念されています。

コロナ蔓延のため、久しく途絶えていた「北海道シリーズ」が復活しましたが、連日の雨に祟られて、前哨戦、延長戦では計画どおりの成果が得られなかったようです。北海道にも梅雨があることを、計画の段階で織り込む必要ができました。

テントの張り代がどんどん上がっています。白馬岳では1張り2,000円+1人2,000円とのこと。槍ヶ岳付近では学生割引があつて、1張り1,000円ということ。この張り代、10日間の定着合宿だと10,000円になるのでしょうか？ 定着の場合は未確認ですが、縦走に出たら間違いなく10日の縦走で10,000円の負担になるでしょう。山岳部の活動の制約条件の一つになることは間違いありません。OB会の支援が必要になつてくるわけです。

長野県下の山岳事故は今年1月～9月3日までの集計で203件起きているそうです。死者・行方不明者が27名、負傷者が111名とのこと。特に中高年登山者の事故発生数が増えているとのこと。〔信濃毎日新聞〕

十分に注意して登山を楽しみましょう。

(岡田 健志)

## ■会費納入のお願い

2023年度(23年6月～24年5月)の会費納入をお願いいたします。

会費(普通会費)は卒業年次に関係なく、一律5000円です。(ただし、卒業後60年以上経過した会員については会費免除となります)。

また、普通会費のほかに、期間を問わず賛助会費を募集しております。賛助会費は一口1000円で、口数は任意です。

近年、学生部員の増加に伴い山岳部への支援強化の必要性が高まっておりますので、その資金手当てのためにも、賛助会費へのご協力をお願い申し上げます。

### ◎会費納入先◎

三菱UFJ銀行 赤坂支店

口座名 針葉樹会

口座番号 普通4825647

\*振込の際、適用欄にお名前と卒年次をご記入ください。

会計幹事 中西 茂